

# アールズの開拓者

クー.

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

帰って来た男、白藤アカネが主人公の非開拓物語。

前作『アーランドの冒険者』からの続きものです。

自サイト冒険回帰からこちらのハーメルン様にマルチ投稿させていただいております。

# 目次

奇襲発生	1
再会	8
メイドと政務官	23
妄想派遣員	37
因果応報	51
上り坂	63
イメーヂチェンジ	77
一番弟子	92
はじめてのおつかい	107
お約束	123



## 奇襲発生

アーランドから現代に帰ってきて約一年、俺は特別製のトラベルゲートを使って再び異世界を訪れていた。

朝露のせいか、上下の黒いジャージが少し肌に張り付いた感触を覚える。

薄く日の差す森の中、木々の香りが懐かしく感じた。

帰って来たんだと、強く実感する。

「随分と早く帰ってきてしまった……しまった」

それも全ては俺がフリーター故の父の勘当宣言が悪い。

おそらく勘当宣言の方が悪い。ただし、より憎むべきは……。

「学歴が……学歴が憎い！」

白藤アカネ、最終学歴中卒。

世間の風が冷たい、いわゆる死にステータス。

注釈としてはビツクになれば、中卒でもあんな風に成功できるのよ！ という感じに

尊敬ステータスになる。

弟、東京にある大学の『にある』を抜いた大学に現役合格。

ヤバイ・パナイ・スゲエの三拍子。

しかも医学部、予測だが、俺のいない間に改造手術を行った。

さらに！ どこぞの美人なお嬢様が彼女様と言う……クソ！ あいつ絶対俺の事バカにしてた！

醜い男の嫉妬だと、内心では気づいているが気づきたくない。

「家族は何も言わない……が！ 俺が俺をバカにしやがる！」

クツ！ だがこの世界なら、俺はある程度、ある程度の地位を獲得している。

そうさ！ 向こうでは俗に言うフリーター（中卒）だったが、こつちなら錬金術士様だぜ！

「と言う訳で！ クーデリアさんに会いに行こう」

とりあえず森を軽く抜けて場所を把握しよう。

アーランド近辺の森じゃない様に感じるから、ココは俺の冒険者としてのセンスが問われるな。

「クツクツク、言っても俺は五年は冒険者やってた、いわば……ベテラン！」

含み笑いと共に、俺は薄く草の生えた地面を踏みしめて、成長しすぎた草を手でかきわけながら森の奥へと進んで行った。

遭難した。

「遭難です！　H A H A H A !」

笑えねえよ。

「いや、たぶん方角はあつてははずだ。うん、知らない場所だけど……」

北に行く事、二日間、狩猟と採集の生活も慣れたモノで特に辛くはない。が、折角戻つて来たのに皆の顔を見れないと言うのは辛いモノだ。

「普通に前と同じように、うに林に来れると思つたと言つのに」

ポケットにしまい込んだトラベルゲートを恨めしげに見てしまう。

前にちゃんと家に帰れたのが不思議なくらいだ。

「……むっ？」

耳をすますと、どこからか高い女子の声が……。

「こつち、かな？」

俺の背よりも少し高い草の壁に突入し、少し屈みながら少しずつ前進していった。所詮は防御力Eのジャージ、草がチクチクと肌に刺さる。

「よーし、もつと奥に行つてみよう！」

緑一色の視界の向こうから、確かに声が聞こえた。

神はまだ俺を見放してはいなかったようだ。

「ダメです！ 絶対に！ これ以上メルルを危険な目に……」

ようやく、葉っぱの間から姿を確認できた。

木々のない、開けた原っぱに立っているのは、錬金術士チックな服を着たお嬢さんに、片方は後ろ姿だけしか見えないが、メイドさん？

まあいい。よし、立ち上がって紳士的にあいさつを――。

「うおおおおお！」

「へっ!？」

曲げていた腰を戻して、立ち上がろうとしたら、手で押さえていた草が跳ね上がった。さながらデコピンのように、このスイートフェイスに直撃をかましてくれた。



「きゃ、キャー——！」

え、何故にこのメイドちゃん俺の事見て悲鳴上げてるの？

それにそんな腰を抜かしちゃって……。

「わー！ く、草のお化け!? こ、これでも喰らえ！」

「にゃ？」

視線を前に戻すと、茶色い物体が俺の眼前に——。

刹那、俺の脳裏にある思い出がよみがえった。

川に落ちたある日の俺は、がむしゃらに手を地面に叩きつけた……するとそこには。

「う、うにいいいいいい!!」

叫びと同時に俺の額に鋭い痛みが走った。

俺は、まるで剛速球を受けたかのように後ろに吹っ飛び、ゴロゴロと草の中を転がった。

「ケ、ケイナ！ 立って！ 逃げるよ！」

「は、はい！」

「ご、ゴルアアアアア！」

著しく失われた言語能力を駆使して俺の怒りを伝えようとしたが、一目散に逃げられてしまったようだ。

な、なんて恐ろしい——おおよそ同じ人間とは思えない。

あんな……あんな！ 恐ろしい物体を同族に向かって投げるとは……。

「か、可愛い顔してやんちゃ娘って訳かよ……」

俺はよろよろと立ち上がり、今度こそ草の中から這い出た。

さながら落ちたリングから這い上がってくるボクサーのように。

「ゆ、許さねえ。許さねえ！」

娘つ子共の足跡の方向を指差して、俺は高らかにそう言った。

やられたら三倍返し、このアカネ様に向かって！ うにを投げるといふ行為、後悔

させてやる！

よし、追跡だ追跡。待ってろやがれ！

「……って、うお!? 草の化け物!」

少し歩いた所にあつた小川には、草が体中に張り付いた森の怪物が写り込んだ。

「……………」

立ち止まって、少しさっきの音声を脳内でリプレイしてみた。

『く、草のお化け!』

真上から照りつける太陽を、俺は仰ぎ見た。

そして腕あたりの草を手で払った。

「……………」

目を瞑って、よく考えてみた。

そして、口を開いて、小さく自分自身に問いかけるように呟いた。

「7…3……………かな？」

ちなみに俺の責任が3だ。

俺は首を前に戻して、お嬢さんたちの向かった先を見て、指を前に突き出した。

「やっぱり許さねえ！」

俺の器の小ささを舐めるなよ、小娘ども！

このアカネ、今年で二十四だが、たとえ相手が十代前半であるとも情け容赦は一切な

い！

待っているとはかりに、俺は駈け出した。

## 再会

小娘を追う事、早数十分。

足跡を追跡していく内に街を発見したので俺は意気揚々と突入した。

「いや街と言うよりも……」

首を曲げて右左、目に入るのは木造の家その他には木と草、そして飛び交う蝶々。

「田舎か」

うん、アーランド寄りではなく、この穏やかさはアランヤ村に近いモノを感じる。

ほら、耳を澄ませると鳥たちのさえずりが……。

「はっ!?!」

いやいや、和んでる場合じゃない。

すぐに俺は足元を確認するが、人通りの多い道なのかどれが誰の足跡かもうわけがわ

からない。

しかし、ココであきらめては名探偵の名折れ。

俺は目線を縦横無尽に走らせ、脳をフル回転させ、そして答えを導き出す――。

「よし！ 俺の推理（勘）ではコッチだ！」

そのように周りに主張する事で、決して考えなしに行動しているのではいとアピールしつつも適当に村の奥へと進んだ。

……大変な事に気付いた、ツツコミ役がいらないじゃないか。

その事実には愕然としながらも進んで行くと、石造りの目立った建物が増えていき、アーランドの職人通りに近い様相を醸し出してきた。

「むむっ」

咄嗟に俺は石壁に身を隠した。

そこから見えるは、建物に挟まれた路地の石畳を進んで行くうに娘とメイドちゃん、そしてツリ目のお兄さん。

クツクツク、この名探偵アカネの名推理にかかれば貴様らを見つげ出す事くらい朝飯前だのクラッカーよ。

「げへへ、まずは泳がせてから家突き止めてやるでやんすよ」

妙に雑魚臭い喋り方になってしまった。

しかし、有言実行。お嬢さん方のお家を見つげ出してやろう。

俺は尾行を開始した。

そして石畳が途切れ、土の道につながった辺りで、遮蔽物を気にシフトしたあたりで

俺は疑問に思った。

家を見つけ出して何すればいいのかな……と。

「お、親を脅迫して慰謝料を請求？」

すげえ、俺ってば外道物語の主人公みたいだ。

「クツ、探偵イコール尾行と言うエキセントリックな考えが裏目に出たか……」

それにしても、このあたり全然家とかないんだけど、あの小娘は——。

「——っ!?!? ん!?!?」

木から顔を出して、坂の上の方を見ると、そこには大きなお城が。

アーランドでも見慣れたもんだが、問題はこの辺りにはアレしかないと言う事だ。

「っ、つまり……」

うに娘〓お姫様、メイド〓メイド、お兄さん〓偉い人。

こういう事か!

「な、成る程……姫、姫か……」

思わずげんなりとした口調になってしまう。

俺としてはデコピンの一発で許してやろうとか思っていたが、相手が姫となると。

『痛いっ!?! お父様、こいつ処刑して!』

「ぎ、斬首——打首獄門に処して……市中引きずりまわし!?!」

思わずごとくりと喉が鳴ってしまった。

どうしよう、帰ろうかな？

そうこうしている内に彼女らは白の中へ入り、俺は城門の前まで来てしまった。

そうだ！ 門番さん、僕を止めてください！

「おいあんた誰だ？ こころじゃ見ない顔だな、ココに何の用だ？」

声をかけてきたのは、どことなくさつきのお兄さんと似た雰囲気を持った門番と思われる少年。手に鉄製の手甲を付けているところを見ると、以前の俺と同じ格闘タイプと思われる。

「おいおい、俺の事を知らないのかい？」

止めてほしい、でも回ってしまふ、俺の舌——アカネ、心の俳句。

「いや、知らないから聞いてるんだが……」

どことなく困惑した様子で、そう言ってくる門番君。

押したら入れそうな気がする……よし、ここまで来たら城まで潜り込んでやろう、そうしよう。

「オッホン！」

咳払いを一つ、姿勢をただし恭しく一礼をする。

「私、アーランド共和国ギルドのギルドマスター、クーデリアさんの秘書のアカネと申し

ます」

どこかでクーデリアさんの怒声が聞こえた気がした。

そりやこんなジャージの秘書なんていらないうすよね。でも可愛い嘘なんです、許して下さい。

「こちらの政務官の方に直接、お伝えしたい事があり馳せ参じた次第です」

『直接』のところを無駄に強めて言ってみる。特に意味はないが相手がどう受け取るかは分かりません。

「あ、兄貴にですか。分かりました。ど、どうぞお通りください」

軽く一礼をすると、横にどいてくれた。

俺はまるで一切の虚飾を感じさせないように、堂々と城門をくぐった。

横目でちらりと彼を見る、よくよく見ると幸の薄そうな顔つきだ。

少年よ、世界の嘘や暴力に負けず強く生きろ。

あとごめん、後で君はその兄貴に怒られると思う。

「……ミツシヨンコンプリート」

ぼそりと小さく言葉を発し、俺は城へと潜入した。

「ヤッ……ッ」

赤い絨毯などは特に引かれていない、松明が壁に並んだ冷たい石造りの廊下を歩いて



いく。

歩いて上って歩いて歩いた。

すれ違うメイドさんには軽くウインクをしてやり過した。

皆、照れてしまったのか目をそむけてしまった。照れ屋さんが多い事だぜ。

「むっ、大きめの扉発見」

周りに人がいない事を確認して、俺は一切の迷いも躊躇もなく扉に耳を張り付けた。

「とにかく、錬金術士だけは絶対にダメだ。わかったかね？」

いきなり存在を否定された。わかりたくありません。

すると、次に聞き覚えのある娘っ子の声が。

「……もういい！ お父様のおたんこなす！」

「お、おたんこなす!? コラ、メルル！ 待ちなさい！」

あ、やばい。そう思って俺は耳を離して一歩足を引いた。

それが間違いだった。

「——っ!?!」

勢いよく、弾かれるように開いた大きな扉が、俺の顔全体に、蠅叩きのように、正面から、ブツカツタ。

悲鳴も出なかった。

さらにはコメディイのようにそのまま扉に張り付いて、後頭部が石壁に衝突した。まさしくダブルショック。

その場でうずくまり、遠ざかる足音の方向を見ると、うに娘の後ろ姿が……。

「いい、一度ならず……二度までも……いや、痛みで言えば三度まで……！」  
ゆ、許さん。こんな屈辱を！ この俺が！

もう怒った。姫と言えど許さん、逃がさないぜお転婆ガール！

でも、痛いからもうちよつと休ませて。

あ、ちよつと涙出てきた……。

痛みが引いてから城を出て、門番君の事も無視して俺は街へと躍り出た。

道行く人にお姫様の事を尋ねると、町外れの小屋に行っているだろうとのこと。

そして今、俺はついに姫様を追い詰めたと確信した。

「ここがあの女のハウスね……古いか」

黄緑色の屋根を持った石造りの家、煙突あり、井戸あり、水車あり。錬金術士的にみ

ると使いやすそうな施設だが……。

「こんな家に住んでる人間はおおよそまともな奴じゃないな……」

右を向くとそこには魔の植物、うにの木が。

俺から見たら手榴弾が木に生っているのとまるで変わらない。

「まあいい、では！ 邪魔するぜえ！」

正面を向き直り、俺は大きく扉を開いた。

ノックはしない、それがアカネと言う男だ。

「わっ!？」

驚いて声を上げたのはうに娘、よしいたぜと補足したその横には……。

「……トトリちゃん?」

「……アカネさん?」

大きく目を見開いて、口をぽかんと開けているのは見間違いようもなくトトリちゃんだった。

ただ以前と違う青を基調とした服によつてか、前よりも少し大人びて見える。

相変わらず可愛さメーターが振りきれれるほどの可愛さだ。

頭が真っ白になっている俺に向かってトトリちゃん少し首を傾げて口を開いた。

「アカネさん……ですよね?」

「いいえ、アカネの弟です」

胸を張ってそう言いきると、トトリちゃんは真つすぐ俺を見て微笑んだ。

「それじゃあ、やっぱりアカネさんですね」

「その笑顔……まさしくトトリちゃん」

俺とトトリちゃんは互いに歩み寄って、手を握り合った。

なんとという運命的出会い、これもトラベルゲートの導きか……。

「おかえりなさい、アカネさん」

「うむ、ただいま帰った」

互いに笑いあつて、手を離すと。うに娘が話しかけてきた。

「あの、トトリ先生。この黒い人誰ですか？」

「あ、うん。この人はアカネさんって言つて、わたしの弟子……かな？ 冒険者では先

輩なんだけどね」

「へえ！ トトリ先生の弟子さんですか！」

そう言うとうに娘はトトリちゃんもびつくりなくらいの良い笑顔を浮かべて、俺に向き直った。

「初めまして！ わたしメルルって言います！ こっちは親友のケイナ！」

「よろしくお願い致します」

そう言つて恭しく一礼するメイドのケイナちゃん。

おしとやか度が明らかにメイドの方が上なのはどうなんでしょうか。

ふむ、憎き相手ではあるが、トトリちゃんの知り合いの様だから挨拶はしつかりしてやろう。

「うむ、よろしく、メルルちゃんにケイナちゃん」

「え？ あの、アカネさん。メルルです。メルルリンス・アールズ」

……………よし、からかつても大丈夫なタイプの姫だ。

「メルルシャンプー・アールズ？」

「と、トトリ先生、なんなんですかこの人〜！」

戸惑つたような、怒つたような様子でメルル姫はトトリちゃんに助けを求めた。

「あはは……アカネさんはこういう人だからしょうがないかな」

トトリちゃん、こういうつてどういうですか？

声に出しはしないが、心の中で俺は落ち込んだ。

「アカネさん、あんまりいじめちゃダメですよ？」

「ういいうい」

そう言つて、俺は再度メルル姫の事を見た。

「それではよろしくお願ひします。メルル姫様」

「あ、姫はいらないますよ?」

「いや、リアル姫様を姫って呼ぶ機会なんてあんまりないから、姫で」

姫様はアゴに手を当てて、微妙に納得できてない表情ながらも了承してくれた。

「しっかし……」

「……………?」

視線をメイドのケイナちゃんに向けると、可愛らしく小首を傾げられた。

ネコミミの生える薬を持っていないのが悔やまれる、幻のネコミミメイドさんが爆誕するチャンスだというのに。

まあそれはそれとして。

「姫様がトトリちゃんを先生って呼ぶのは、どういう訳で?」

「はい! トトリ先生は、私の錬金術の先生なんです!」

「マジで!」

「マジです!」

姫様はノリよく大きくうなずいた。

成る程、トトリちゃんもそういうお年頃だったか……。

「ううっ、出会ったときに釜を爆発させていたあのトトリちゃんが——!」

「あ、アカネさん! 変な事言わないでください!」

弟子の前で過去の失敗を暴かれたせいか、少し頬を赤くして怒ったように制止の声をかけられた。

「わあ、やっぱトリトリ先生にもそういう時があつたんだ!」

「う、うん」

照れた様に笑つてお茶を濁すトリトリちゃん。

ああ、いいねえこの空気。このまつたりのんびりした感じ……。

「あれ? そういえばメルルちゃん、何かお話があつたんじやないの?」

「あ、そうだった」

口を手を当てて、はつとするメルル姫。

折角だからと俺も話に参加し、トリトリちゃんとメルルちゃんの座るソファの前にケイナちゃんと二人で立ちながら、姫様の話を聞いた。

「ふむ、なるほどなあ」

姫様の話は要約すると、父親が錬金術なんかで遊んでないで国を発展させると言う王族の責務をしつかりと果たしなさい、ということでお怒りらしい。

でも錬金術を捨てきれないし、アールズの外の世界を見たいからなんとかしたい、と。

そこでトリトリちゃんは一つ案を出した。

「そうだなあ、錬金術が国の発展に役立つつてことを証明すればいいんじゃない?」

……国の発展。

「なるほど、流石トトリ先生。でも具体的にはどうすればいいんですか？」

「うーん、なんだろう……アカネさん、何かありますか？」

「……………」

国の発展、つまりは発展途上国、これは、なんとすべきか、そう。

「金の匂いがするぜ……」

「はい？」

「ん？」

気づけば皆が俺の顔を見ていた。なんだい照れるな。

「うん、アカネさんは時々変だから、あんまり気にしないであげてね」

「は、はい」

「わかりました？」

トトリちゃんの非常なお言葉に、メルル姫とケイナちゃんはそろって頷いてしまった。

貧乏や、全部貧乏が悪いんや、アカネは悪くない。

「あ、そうです。この国の事を一番知っているのはルーフェスさんですし、あの方に相談してみてもいいかがですか？」



そこでケイナちゃんが、たぶん良い感じと思われる提案をした。それに対するメルル姫の反応と言えば。

「うう、ルーフェスかあ……相談なんてしたら反対にお説教されちゃいそう」

ああ、俺もクーデリアさんに相談に行くと気づいた時にはお説教されてる事がある。

「……ケイナちゃん、そのルーフェスさんって偉い人？」

「はい、ルーフェスさんはアールズ王国の国政を一手に担っている方ですから「なるほど」

つまり、この国で色々するなら挨拶に行つた方が良いかもしれないな。

これでも一応錬金術士さんですし、俺。

「それじゃあ、明日にでも挨拶に行くかな、トトリちゃんついてきてくれる？」

「はい、それじゃあその時にメルルちゃんの事も話してみるね」

「あ、ありがとうございます！ トトリ先生！」

安心したのだろう、大きな声がアトリエに響き渡つた。

あとはこの笑顔がどう転ぶかは、明日次第か……。

ん？ 明日？

「あ……トトリちゃん」

「はい？」

俺は目線を横にずらして、小さく口を開いた。

「今日の宿代貸してください……」

その日は、気まずい雰囲気を残したまま俺はアトリエを去ってしまった。

貧乏や、全部貧乏が悪いんや。

## メイドと政務官

早朝から、俺はトトリちゃんのアトリエで釜を使わせてもらっていた。

「そおいつー！」

ポケットから取り出した異世界移動トラベルゲートを釜の中にシユウウトー！

「超エキサイティングー！」

「い、いいんですか？」

後ろからトトリちゃんの不安げな声が聞こえてきた。

確かに、これで俺は材料から集めないと帰れなくなつたが。

「これが俺の覚悟だ……！」

「そ、そうなんですか」

使えば帰れる状況だとコンビニ二行つてくるみたいなのりで異世界を横断してしまう気がする。

そして戻つてこようとしたら、今回アールズに来たみたいにトンチンカンな場所に出してしまうかもしれない。

現代の娯楽や趣向品は俺の脆弱な精神を容易に崩壊させてしまうからな、これくらい

やっておかねば。

「……退路は断つたぜ」

コレで一切惑わされることなく、こっちの事に専念できるな。

「よし、それじゃあルーフェスさんとやらの所に行くか」

「はい」

俺とトトリちゃんは上で寝ているメルル姫を起こさないように、静かにアトリエから出ていった。

昨日とは違い、特に問題なく城の中へ入り、トトリちゃんについて行き執務室の前まで来た。

「それじゃ俺は待つてるから先にメルルちゃんの事話して来て下さいな」

「？ アカネさんも一緒に来ればいいんじゃないですか？」

小さく首を横に傾けて疑問を口にするトトリちゃん。

それに対して、俺は正面から視線を合わせて。

「ふつ、俺がいると話が進まなくなるぜ？」

無駄にカツコつけてみた。

「た、確かに……」

理解してもらえたようで、トトリちゃんは神妙な顔をして頷いた。

そしてトトリちゃんを送り出して数分後……。

「暇だ」

柱に寄りかかって向こう側の松明を見つめる遊びも限界がきていた。

「なるほど、コレは試練ってわけか」

考えてみるとこっちに帰ってきてから、少し行動が自重気味だった気がする。

ここではじめて過去の俺を取り戻すでしょう。

「昔の俺か……」

ステルクさんに自転車でタツクルしたりとか。

突然叫んでみたりとか。

失踪してみたりとか。

頭の病院が必要かもしれない。

心だけじゃなく体も十代だと恐ろしいなまったく。

「よし、大人しく架空の相手とじゃんけんでもしていよう」

その名も妄想じゃんけん、想像の中の相手とじゃんけんをするという高尚な遊びだ。それじゃあ、相手は……。

……

……

目を閉じて脳内でじゃんけんをし続ける事百数回、全てに勝ってしまったている。バルタン星人では俺の相手には不足しているようだ。

「……………」

「アカネ様？」

「にゃ?！」

目を開くと、メイドもといケイナちゃんが俺の顔を見上げている姿が映った。

俺はすかさず手を前に出して。

「じゃんけん!！」

「え?！」

気の抜けた高い声をあげるケイナちゃんに少しだけ罪悪感を覚えてしまったが俺は止まらない。

「ほいつ!！」

反射的にケイナちゃんも手を出してくれて、その結果は。

「……………ぬう」

「あの……………」

戸惑ったように俺の手と顔を交互に見るケイナちゃん。その視線の先にあるのは俺のグーとケイナちゃんのパー。

「……………俺の勝ちだな」

俺は勝ち誇った笑みを浮かべてケイナちゃんの事を見下した。

「え、えっと、その……………」

何かを言いたそうにしている、まだ俺が目上の人だと言う意識があるのだろう。もうちよつとフランクに接してもらいたい。

そんな想いを込めて俺は口を開いた。

「俺のグーは、パーを貫通するんだ」

「ええっ!?!」

少し大きな声を出して驚かれた、そうそう、そういうリアクションでいいんですよ。

「そしてグーはグーを粉碎する」

「ひ、酷いですよそんなのは……………」

「ええ、でもトトリちゃんがいつも言ってるし……………」

「ト、トトリ様がですか!？」

ケイナちゃんは目を見開いて驚いた。

うん、俺もトトリちゃんがそんな事言ったら驚くよ。

「そうそう、アーランドにいた頃のトトリちゃんの座右の銘は『勝てばいいのよ勝てば』だったからな」

「そ、そんな、嘘ですよね……?」

不安そうな顔つきで俺を見上げるケイナちゃんに、俺は意気揚々と。

「うん」

頷いた。

「……………」

ケイナちゃんは数秒の間ポカンとした顔のままフリーズしてしまった。

そして解凍するやいなや。

「アカネ様、そういう嘘はいけませんよ」

少し強い、本当にほんの少しだけ強い口調で咎めるようにそう言うケイナちゃん。

どうやら俺がお客様ポジションを抜け出すにはまだ時間が必要なようだ。

ここは大人しく交友を深めるとしよう。

「おーけー。嘘は言わないから、もう一回」



「え、あ、はい」

じゃんけん、ほいっと手を出すと。

そこには俺のチョコキとケイナちゃんのグーが。

「……も、もう一回だ」

「は、はい」

ほい、ほい、ほい、ほい、ほい。

五回連続でじゃんけんを繰り返す。

そして負けた負けた負けた負けた——負けたあああつ！

現実を受け止めきれず、俺はさらに五回繰り返し。五回負けた。

眼前には俺のチョコキとケイナちゃんのグーが。

「バカな——！」

「す、すみません」

謝らないでくれ、惨めな気持ちになる。

きつとこの子は幸運にA+とかの補正が掛っているに違いない。

そう考えないと俺はじゃんけんんでバルタン星人にしか勝てない男になってしまう。

「アカネさん、お話終わりましたよ」

そして後ろの方の扉から出てくるトトリちゃん、クツ、タイムリミットか。

「仕方ない。ケイナちゃん、じゃんけんマスターの称号は君のモノだ」

「あ、ありがとうございます？」

「……………最後にもう一回だけ」

じゃんけん、ぽん。

「…………俺のグーはパーを貫通」

「しませんよ？」

頬笑みまじりにそんなこと言われたら言い返せません。

「失礼しまーす」

トトリちゃんを伴って執務室に入ると、窓の前に置かれた大きな仕事机に鋭い雰囲気を持った人が座っていた。

この目の鋭さはステルクさんに匹敵するかもしれない。

俺が机の前まで着くと彼は立ちあがって。

「お初お目にかかります。私、アールズ王国の政務官を任されております、ルーフェス・フォールケンと申します」

そう言い終わると、恭しく一礼をするルーフェスさん。

瞬間的に理解した。これは、敬わなくてはいけないタイプの年上の方だ。

「ど、どうも。アーランドで錬金術士やってみましたアカネと言います」

「ええ、ご高名はかねがね承っております」

「(ぎ)んっ——!?!」

ご高名!?! GOKOUMEI!?

それってご高名(ぶに)ってことじゃなくて!?!

「(ぎ)、(ぎ)、(ぎ)ご高名ですか?」

俺に似つかわしくない言葉だ。ほら、何かじんましんとか出てきそうだもん。

「ええ、大変優秀な冒険者であり錬金術士であると伺っております」

ひいっ!?

一体何が起こったと言うんだ。

アーランド↓中継地点↓アールズとしたら、中継地点で俺の話が大変なほどに捻じ曲

げられたのか!?!

「そ、そんなことないですから! 俺なんてただの頭の悪い子ですから!」

「(ご)謙遜なさらずとも、数多くの依頼をこなしギルドに対して大きく貢献したと聞き及んでおります」

「……………」

それは俺の相棒ですと言いたいが、俺も調合依頼は確かに結構受けていた。

だけどそれは借金があるから仕方なくやってたわけで、俺がスゴイ真面目な人間みたいな言い方をされると……。

「アカネさん大丈夫ですか？ 顔赤いですよ？」

照れてしまう。

「本題！ 本題に入りましょう！」

手をパンパンと叩いてそう言い放つ。

明らかに俺よりも格上の方に敬われているというこの空気が居た堪れない。早々に終わらせよう。

「実は俺はこの国で錬金術士として活動させていただきたいんですよ」

「え？ そうなんですか？」

そういうえば詳しくはトトリちゃんにまだ話していなかったか。

とりあえず視線でイエスと答えておこう。

「成る程、それは願ってもない話ですが……本当によろしいので？」

「よろしいです、国の発展に協力したいですし、こっちにはトトリちゃんもいますし」

「わたしがですか？」

「うむ、おそろくトトリちゃんを追って知り合い面子は集まってくるだろうからな」

第一にミミちゃん、次点で師匠、師匠が来ればステルクさん、さらにステルクさんを追って後輩君ことジーノ君。

トトリちゃんがいれば皆が集まる法則だ。

「それで、いいですしょうか？」

——やばい囁んだ。

それもこれもこの場の、もといルーフェスさんの帯びた鉄の様に冷たい空気が悪い。

「もちろんです。アールズ王国はアカネ様を喜んで受け入れさせていただきます」

スルーしてくれた！

冷たそうな人だと思ったけど、意外と優しい人だとわかりました。

いや！ 今のはルーフェスさんの人柄を見極めるために、わざと！ わざと囁んだんだ！

これがアカネ流の人物測定方法のさ！

「それではアトリエに関してですが、何かご希望はございますでしょうか？」

「ええつと、そうですね……………」

ん？

「——んん!？」

「ご希望はございますでしょうか？」

待つんだ。この質問の意図を考えよう。

希望を言った場合↓ではそのように造らせていただきます。

言わなかった場合↓ではこのように造らせていただきます。

「……………」

思わず息を飲んでしまった。

「そ、そそ、それはまさかそちらでアトリエを用意するとかそういう話ですますでありますか？」

「そうですね？ 国の発展にご協力いただけると言うのなら当然の事です」

ああ、そう言えばさっきそんな感じの理由を言いましたね。

スゴイ、国ってスゴいな。

まさか俺一人のためにアトリエをこさえてくれるとは。

俺としては適当に依頼をもらいながら、トトリちゃんのアトリエに入り浸るつもりだったと言うのに。

「そ、そういうことなら……………」

ど、どのレベルまでなら許されるんだろう？

2LDKくらいだろうか？ いや、でも人の金を使って用意されるんだしあんまり大

層な要望を出すと引かれそうだよな。

……仕方ない、ここは伝家の宝刀を抜かせてもらおうとしよう。

「キッチンだけ取りつけといてもらえるなら、大体は今のトトリちゃんのアトリエと同じような内装でいいですよ」

本来なら初めて入った飲食店で使われる秘奥義。

その名も『隣の人と同じのお願いします』

「左様ですか。ではそのようにさせていただきます」

「お、お願いします」

これで俺はアールズ王国の雇われ錬金術士になったという事か。

やったよ父さん、俺就職が決まったよ！

コンビニアルバイターから王国の錬金術士にクラスチェンジしたよ！

「それじゃアトリエができたらバリバリ働かせていただきますー！」

依頼をこなして報酬をもらう日々がまた始まるぜ！

「ええ、よろしくお願い致します」

それにしてもこの人はまったく表情が変わらない、さらには声も抑揚がない……仕事人って奴だな。

「あ、それからアーランドのギルドに手紙を送ってもらえたりしますか？」

「構いませんが、どのような内容で？」

「えっと、クーデリアさんに俺がこっちにいる話と相棒をこっちに送ってもらおうように……つて感じでお願いします」

はたして俺の相棒はこちらで受け入れてもらえるのか……でもあいつがないと材料集めるのも大変なことになるから来てもらわないと困る。

「承りました。ではそのように」

「はい、それじゃあ失礼します」

「失礼します」

俺に続く形でトトリちゃんも執務室を後にした。

部屋から出て、俺は盛大に息を吐いた。

「はあ……疲れた」

まさか俺がアトリエを自分で持つなんて話になるとは……気分が高揚する点もあるけど、責任という単語が否応なしに押し掛かってくるな。

……うん、頑張ろう。



## 妄想派遣員

城からの帰り道、坂を下っていく最中、俺は完全に浮かれていた。

「アトリエ、アトリエかあ……」

一国一城の主になる気分だ。責任やら諸々があるだろうが、このアカネ、ついにアトリエを手に入れることとなった。

「こつから、弟子とかもとったりして……な！」

「アカネさん楽しそうですね」

「そりゃあなあ」

将来的にこの俺が先生とか、師匠とか呼ばれる訳だ。

そしてここがわかりませんとか言われて、そして知的に素敵に華麗に教える！

「まずはアカネチルドレン第一号となる逸材を見つけなければな」

「アカネさんの弟子になれる人ですか……」

トトリちゃんが頬に手を当て視線を逸らした、誰かいないかと思いだしているのだから、実はもう当てはある。

「ピアニヤちゃんを呼ぼうと思う」

「え？ ピアニヤちゃんをですか？」

「うむ、錬金術の才能あるし、俺の事をよく分かっていてくれるしな」

俺が唐突にワンと鳴いたとして、我が義妹ならニヤーと返してくれる。そのくらいには理解していてくれている。

「あー、それはちよつと……」

言いづらそうに溜めを作るトトリちゃん。

「何かダメだったか？」

「えつと、お姉ちゃんが……」

「……………ああ」

理解した。

確かにあの妹大好きお姉ちゃんが、こうやって異国にトトリちゃんを送り出すのを認めさせるだけで、とれだけの労力が必要だったかは想像に難くない。

「たぶんピアニヤちゃんがいなかったら、わたしココに来てないかもしれないんですけどしたから」

「だろなあ。もしもピアニヤちゃんまで取り上げようものなら……」

「自分もこつちに住むとか言いだしちゃいますよ」

「うむ」

ヘルモルト家の平和のためにも妹を弟子にする案は廃するでしょう。

となると、弟子をどうするかがまた問題になるな。

「街中でスカウトアタックをしかけるしかないか」

「あんまり変な事しないでくださいね？」

なんで変な事をする前提なのかを聞きたいが、俺はトトリちゃんの口からその理由を聞けるほど強い心を持っていない。

「まあ、国が発展すれば人も増えるだろうし、アカネ様の弟子になりたいって向こうから来る可能性が無きにしもあらず」

「確かにそうかもしれないですね」

「ああ、噂だけなら俺も仕事のできるクールガイみたいだからな」

ただ、できることなら一生俺に関わらないでその理想のイメージを崩さないでほしいです。

「いつそメルル姫を俺の弟子に……」

「ダメですよ？」

「……はい」

笑顔がちよっぴり怖かった。

.....

坂を下り、職人通りを抜けて、木々が並ぶ通りまで来たところで、俺は思いだした。早々に仕事しないと今日の晩も紐生活になってしまう。

由々しき事態だ。

「トトリちゃん、こつちにアーランドのギルド出張してきてたりしないか？」

「あ、来てますよ。わたしがこつちに来る時にフリーーさんも誘ったんです」

「フイ、フリーーちゃんだと」

その瞬間、頭に浮かんだのはメルル姫とケイナちゃん。

大変だ。あの腐り系女子の格好の獲物じゃないか。メイドと姫だよ。妄想大爆発しちゃうよ。

「そ、そうか。それなら挨拶しに行かないとな」

そして釘を刺そう。こつちではキレイに生きなさいと。

「それならそこのお店にたぶんいると思いますよ」

トトリちゃんの指差す先には酒場と思わしき、というか酒場があった。

人見知りか少しは緩和されたとはいえ、あんな人の賑わう場所にいるのか。

……大丈夫か？

「そんじゃあ、俺はフィリーちゃんに会いに行つてくるよ」

そして仕事ももらおう。

「はい、それじゃあわたしはアトリエに戻りますね」

「おう」

トトリちゃんと別れ、俺は早速酒場の前まで行き。

質素な木製の扉を押し開いた。

ゲラルドさんの店よりも一回りほど小さい内装で、朝早くと言う事もあるのか中は閑

散としていた。

「む、誰もいない？」

カウンターのの方に目をやるも、誰もいなかった。

見たところL字型の造りになっているようだから、死角に誰かしらいるかもしれない

が。

もしくはカウンターの内側に隠れている可能性が……。

「フィリーちゃん、いないのかー？」

声を上げながら二、三步進むと。

「あ、アカネさん!」

いた。角に隠れてたよこの子。

「うむ。お久しぶりです」

「か、帰って来てたんですね、よ、よかったあ」

ほつと息を吐き出すファイリーちゃん。

やはり寂しぼ症候群にかかっていたのだろうか。

「しかしあの人見知りだったファイリーちゃんが、こんな所まで来るとはなあ」

感慨深い、アカネさんちよつと感動しちやったぜ。

「わ、私だつて成長してるんですよ? ……ちよつと帰りたくなつてましたけど」

おい、ぼそぼそ喋つたつもりだろうけど後半聞こえてるぞ。

「そ、そう言えばアカネさんこそ、どうしてアールズに?」

「ん? ふふん」

思わず得意げな感じで笑つてしまった。

俺は咳払いを一つして、おもむろに喋り出す。

「なんと、俺はアールズ王国の発展のためにしばらく錬金術士としてここで働くのだ!」

「え? あ、アカネさんがですか? だってアカネさんって言ったら……………ああ」

「待て、今何を納得した」

「ご丁寧 hands をポンと叩きおって。

「えっと、アカネさんの爆弾は色々役に立つのかなあつて」

「む……」

なるほど、アカネ謹製の爆弾が工事やらなんやらに役立つというわけか。

そして、ルーフェスさんあたりが。

『素晴らしいお手並みです。流星は音に聞いたアカネ様の卓越した技術は……』

「ひい!？」

途中まで想像しただけで鳥肌が立ってしまった。

「フィリーちゃん、ちよつと俺の事貶してみてくれ」

「あ、アカネさん……少し見ない間にそんな趣味が——」

「ありません!」

まったく、これがクーデリアさんあたりなら一呼吸着かぬ間に罵りと嘲りの言葉をよこしてくるというのに。

所詮はフィリーちゃん。ツツコミ役でしかなかったということか。

「つて、こんな無駄な時間を過ごし手に来たわけじゃない!」

「む、無駄つて酷い様……」

「仕事しに来たんだよ仕事」

何があるうと、またトトリちゃんからお金を貸してもらうなんていう事はあつてはならない。

氣にしませんよって感じの笑顔で、お金を手渡されると無性に心が痛む。自分が情けなくなる……。

「お金がほしいんです……」

「も、もしかして無一文なんですか？」

「いや、ゼロ以下、つまりはマイナスだ」

『アカネ、アールズの新生活——マイナスからのスタート——』

将来自伝を出すならこんなタイトルになると思う。

「一日で終わってかつ錬金術使わなくて良くて、かつ楽な仕事を……」

「い、いや、ありませんから」

「だよなあ」

相棒さえいれば、ペチン（残虐表現）ですぐにモンスターを討伐できるというのに。

「アトリエができるまで食いつなげればいいんだ、それだけで……」

「トトリちゃんの所に泊ればいいんじゃないですか？」

「いや、あそこには今、メルル姫がいるからな」



あ、そうだ。

ついでにフィリーちゃんに失礼のないように言っておくんだつた。

「なあファイ——」

「お姫様！ さすがですアカネさん！ もうお姫様と知り合いなんですね！」  
はしやがないでください！

というかさすがって何ですか。

「やっぱり可愛い人なんですか！」

「ん、まあ、そう……だな」

よくよく考えてみればお姫様で可愛いって最強じゃないかあの子。

あれで性格が深窓のお嬢様タイプならパーフェクトだったかもしれない。

「ちなみにメイドの子も可愛いぜ？」

「本当ですか！ メイドとお姫様……禁断の恋……！」

「しかし！ 突如現れるトトリちゃん！ お姫様は錬金術に興味津津！」

「そして徐々に離れる二人の距離……」

「もう主従関係なんて気にしてられない、わたし、全ての想いをあなたにぶつけます  
！」

「うへへへ」

不気味に笑いあう二人。

あれ？ 何か間違つてないか俺。

「あ、あの〜」

突然開く扉、俺はおもむろに振りかえり。

「あん？ 今いいところ、つて……にや!?!」

後ろを振り向くとそこには今話題沸騰のお姫様、ことメルル姫の姿が。やべえ!

「な、何故ここに!?!」

おそらく城に向かっている途中のはず、なんでこんな場所に寄り道を!?

「何か騒ぎ声が聞こえて、何してるのかな〜つて気になっちゃいました」

「な、なるほど」

よかった。おそらく内容までは聞かれていないようだ。

メルル姫が相当に優しい子で、何も聞いていないふりをしている可能性もあるが。

「アカネさん、もしかしてこの子が?」

「うむ、メルルシャンプー・アールズちゃんだ」

「メルルリンスですつてば!」

そうやって必死になればなるほど、俺は思わずからかいたくなってしまうんです。

「ああそうだ。フィリーちゃん、相手は姫様なんだから、失礼な事はするなよ」

「え？ あ、は、はい？」

釈然としない顔で頷くフィリーちゃん。

言いたい事があるならばつきりと言った方がいいこともある。

「そしてメルル姫、こつちが俺の友達兼ギルドから派遣されてきたフィリー……フィリー・ナンチャラーだ」

「アカネさん、エアハルトですから」

怒られた。

「えっと、フィリーさんですか？ はじめまして」

「あ、うん。はじめまして、よろしくねメルルちゃん」

ふ、俺の活躍もあつて二人ともいい感じに仲良くなれそうだな。

俺の活躍もあつて！

「あー！」

「ん？」

「わ、私アカネさんにつられて普通のため口使っちゃったけど、い、いいのかな？」  
今更すぎるだろう。というかそれで怒る子だったら、俺なんて極刑ですよ。

「いいに決まつてるじゃないですか、アカネさんの友達ならわたしの友達ですから」

あれ？ 俺っていつの間にもメルル姫の友達になつてたんだけ？

いや、いいんだけど、一回り違う子から普通に友達認定されると変な気分です。

「お、お姫様と友達、す、すごい！ アカネさん、私なんか凄くないですか!？」

「それ言ったら俺だつてスゴイだろうに」

「将来は社交界にデビューしたりするかもしれないですよ!？」

「……………俺も紳士として本気を出す日が来るのか」

俺のあまりに上品な立ち振る舞いに上流階級の物静かなお嬢様が俺に一目ぼれをして、そしてめくるめく逢瀬の日々。

しかし結婚は反対されて…………。

「舞踏会とかでどこかの王子様に見初められちゃって、でも結婚は許されなくて…………」

フリーリーちゃんがありえない事をぶつぶつと呟いていた。

何言つてんだこの子は。

そんな妄想して恥ずかしくないのかね、まったく。

「あ、あのー、フリーリーさん？」

「あ、ごめんなさい。ちよつと乙女の嗜みがもれだしちゃって…………」

乙女の嗜みと言うには少し毒々しいというか、生々しいというべき趣味だろうに。

「と、とにかく私ここでギルドの準備を進めてるから、用があつたらいつでも来てね」

「はい、それじゃあ、わたしお城に行かなくちゃいけないから失礼しますね」

「あいよ、頑張つてこいよ」

「はい！」

元氣よく返事をしたメルルちゃんは勢いよくお店を飛び出して行った。  
快活な子だな、本当に。

「で、仕事できないの？」

準備中とか今言つてたような気がした。気のせいだと思いたい。

「は、はい。数日だけ待ってもらえれば、なんとかか……」

「数日……」

数日だと、それって完全に紐街道まっしぐらじゃないですか。

こうなれば仕方ないか。

「フリーちゃん、今俺は君から仕事をもらった」

「え？」

「だから、俺が街の外で野宿していても何にもおかしくない」

わかったな？　と言葉にせず目で伝えた。

するとフリーちゃんは一つ頷いて。

「あの……」

「うん？」

「お城に客室とか余ってるんじゃないかなって、思うんですけど」  
「……………んな、都合のいいことあるわけが…………」

そう言いながら、俺は店の外に出て、城に向かった。

あつた。

やはり俺はB A K Aだった。

ルーフェスさんの淡々とした対応が逆にありがたかったです。

## 因果応報

新しい朝が来たので城を発ち、アトリエへ。

昨晩は凄かった。ダブルベッド級の大きなベッドにふつかふかの布団、田舎とはいえやはり城の客間は違かった。

きつとメルル姫辺りは、あの金持ち御用達の天蓋ベットとやらで寝ているに違いない。

「げへへ、メルル姫様とは是非とも仲良くしたいですなあ」  
.....

「うーん」

右左と見てみるが、木やら草やら羽虫やら、人が少ない。

ひいては、ツツコミがない。寂しい。

「へへん、もうトトリちゃんの方に着くから寂しくないし」

意味もなく強がってみたりしながら、アトリエの扉に手をかけて。

「おはよう諸君！」

何も考えずにノックなしで開け放つ、するとそこには――。

「にゃ？」

「へ？」

両腕を上げているメルル姫の後ろで、まさに今、ケイナちゃんが姫のコルセットを外そうとしていました。

なるほどなるほど、お着替え中でしたか。

「……………ゆっくり」

俺は愛想笑いをしながらゆっくりと扉を閉める。

危ない危ない、あと少し遅かったら斬首は免れない事になっていた。

この年になってラッキースケベイベントの片鱗を見る事になるなんて、人生何が起きるか分からんな。

「アカネさん、入っていいですよ」

「あいよ」

トトリちゃんのお許しが出たので扉を開ける。

するとそこには呆れ顔のトトリちゃんとメルルちゃん、そしてちよつと怒っているよ  
うな、そうでもないようなケイナちゃんが。



「悪いとは思っている、反省もしている。けどたぶん次もノックはしない」  
堂々と言いつ切る、やはりアカネさんは格が違う！ 漢らしいぜ！

「アカネ様」

「は、はい」

ケイナちゃんに名前を呼ばれるだけで心臓が飛び上がるかと思った。やっぱりチキンだった。

「アカネ様、女性の住んでいる所にノックもなしにはいるのはどうかと思います」

「……………」

思わずごくりと息をのんだ。

まったくつけ入る隙のない正論だった。

「ま、まあまあケイナ、アカネさんも悪気があつたわけじゃないと思うし、許してあげてもいいんじゃないかな？」

「よくありません！ メルルはもつと危機感を持ってください」

「そうだそうだ！」

囁きたててみた。

「アカネ様！」

「す、すみません」

視線を逸らしながら、小さく謝る。

情けない大人だと、笑うなら笑うがいいさ。

「スゴイですねアカネさんって、ケイナがあんな風に怒るの珍しいですよ」

「うん、アカネさんだしね。あとメルルちゃんの事だったからかな？」

ケイナちゃんを除く二人がぼそぼそと話していた。

「と言うか聞こえてます。」

「お、怒ってません」

「ええ、怒ってるよー」

慌てて訂正するケイナちゃんにちよつと唇を尖らせてさらに訂正するメルル姫。

よし、怒りの矛先よ、明後日の方向へ飛んで行つて下さい。

「私はただ、一般的な常識をですな」

「ケイナちゃん……俺は常識なんて狭い型に押し込まれたくないんだ」

顔を手を当てどこか陰を持たせたような、低いトーンで語りかける。

「そうそう、アカネさんがああいふ風に急に暗くなるのは何かを誤魔化す時だからね」

「ぶっ!!」

思わず嘖き出した。ちよつと待つて下さい！

「い、異議あり！ 物的な証拠を要求する！」

右の人差し指を大きく突き出して抗議する。

気分はニヤルホド君だ。

「その態度が何よりの証拠です！」

「ぐぬう……」

言い返せない。

そうか、確かにいつも俺は誤魔化す時にはこんな感じだった気がする……。  
「誤魔化そうとしていたんですか？」

ケイナちゃんにどこか非難するような目で見上げられる。

そんな俺の口から出た言葉と言えば。

「ちやうねん」

自分に限りなく近い否定の言葉だった。

「……わかりました。次からは気をつけてくださいね」

「はい！」

無駄に勢いと元気の良い返事、信頼性は高い、たぶん。

「あ、そうだ。折角だしアカネさんも一緒に今日出かけませんか？」

「うむ？」

姫様からの誘いとあらば断る理由はないが。

「どこに？」

「街からすぐそこにある、モヨリの森ってところにパイを届けに行くんです！」

「……………」

ここまで名前付けにやる気を感じないのは初めてだ。

チカバの森とか、もつと言えばスグソコの森とか、何でもいけるじゃないか。

「ま、まあいいや。行かせていただきましょう」

「やったあ！ アカネさんが来てくれるなら安心ですね！」

バンザイをして喜ぶメルル姫、なんでこんな期待されているのでしょうか。

「トトリちゃん、俺の事なんか言った？」

「い、いえ、特に何も」

「ルーフェスに聞いたんですよ、アカネさんは凄腕の冒険者だって」

「お、おう。その通りだぜ」

年下とか後輩とかの期待と尊敬には答えたい、それが俺だ。

大抵はうまくいかないが。

「え、でも戦闘はアカネさんって言うより……」

「おっほん！ 何、そこらの雑魚程度ちぎっては投げ、相手にならんよ」

トトリちゃんの言葉を遮って、任せると言わんばかりの視線を姫とメイドに浴びせ

る。自分からどんどんハードルを高くしてしまう、誰か助けてください。

「あともう一人、ライアス君って言うわたしたちの幼馴染も来るんですけど」

「呼んだか？」

少し驚いてピクリと肩が跳ね上がった。

後ろを振り向くと、開けっぱなしだったドアに手をかけている好青年、というかイケ

メン、いや、どっかで見た様な顔が……。

「はっ!？」

この整った顔ながらどこか幸の薄そうな相！こいつはあの門番君じゃないか！

「ライアス君、丁度いいところに!」

後ろでメルル姫の明るい声が聞こえるが、俺の心はどんよりと暗い。

軽はずみな行動は将来に軋轢を生み出すな。因果応報とはまさにこの事だ。

「ん？ あんたは……」

ぱつちり目があつて、そして瞬時に気付かれた。

もはや、隠すことはできそうにない。

「あれ？ ライアス君、アカネさんの事知ってるの？」

「ああ、こないだ城に来た時にな、確かアーランドのギルドマスターの秘書の……」

あん!?! 知らねえよ、そんなもん!

そう言えたなら、俺の人生は結構楽なものだったと思う。

「へ!? アカネさんってそんな偉い感じの人だったんですか!？」

「え、えっと、そんな事はなかったような……」

メルル姫の驚愕の視線やら、トトリちゃんからの疑惑の視線やら、皆の目が俺に集まった。

俺の精神的な焦りはピークに達した。

「し……」

「し……」

メルル姫が言葉を反復したのに合わせ、俺は言葉をつづけた。

「城の中を見てみたいなあ、とか思ってた……ね?」

全ての人から目を逸らし、俺はギリギリ言い切った。

「そ、そんなことのためにわざわざ嘘を……!?!」

「ま、まあアカネさんだし……」

ありがたいいつも頭の悪い事をしていた過去の俺。

おかげで自然と受け入れられた。でも、もともとはお前が悪いんだ、絶対に許さない。

「いやいや、んじやあ何なんだよこいつは!」

どうやら彼の中で俺の扱いは『こいつ』にランクダウンしたようだ。致し方がなし。

「アカネさんは、アーランドで錬金術士やってる人で、えつと……トトリ先生の弟弟子さん、でしたっけ？」

「うむ」

しかし、今になって思ってみるとこの肩書名乗れば普通に通過してもらえたよな。

まあ、あの時はまさかご高名なんて単語が出るとは想像もしていなかったから仕方がない。

「まあ、改めてよろしくお願いします」

「は、はあ、どうも」

握手を求めると、釈然としない表情ながらも応じてくれた。

「よし、平和が戻った所で気分を変えて冒険に出発だ！」

「そうですね！ 行きましょう！」

メルル姫は大変にノリがよろしい方でありがたいです。

「あ、待つてくださいいアカネさん」

「うん？」

いざ行かんとしたところでトトリちゃんに引きとめられた。

「あの、アカネさん、武器とか持ってないですよね？」

「いや、そんなことはない」

腰のウェストポーチに、俺は決して夢と希望だけを詰め込んでいるわけではない。

ゴースト手袋もフラムも、何一つとしてないが。

「見るがよい！」

中から取り出したるは全長22センチほどの、黒色の物体。

「じゅ、銃ですか？」

「わあ、初めて見た、これが銃ですか」

全体が俺のイメージカラーの黒で塗装され、金属質の光沢で鈍く光る黒金の拳銃。

メルル姫が興味津津と言った様子で俺の手に握られた、銃を覗き込んだ。

俺はその額に銃口を押しつけて。

「へ？ な、何を？」

「言い訳はあの世で聞く」

引き金を引いた。

「ひゃ!?! 冷たい!?!」

「銃身からグリップにいたるまでフルメタルですが、これは実は水鉄砲です」

現代娯楽に心を汚染された俺はこっちに来る前に考えた。

時代は格闘よりも銃撃戦だろうと、かといってガスガンやらエアガンやらは持ち合わ

せていない。



なので、そういった物に詳しい友人からこれを賜ったのだ。

「これなら素人でも人を傷つけないとか」

「あの、アカネさん。それで戦うんですか?」

ケイナちゃんにタオルで顔を拭かれながら、メルルちゃんは尋ねてきた。

「最悪の場合、肉弾戦にシフトしよう」

はやめに本物を調達したいです。

「な、なあ、本当に大丈夫なのかこの人?」

ライアス君が小さくメルル姫に耳打ちしたが、聞こえてしまった。

「大丈夫に決まってるよ、今はふざけてるだけで、本当は歴戦の冒険者さんだから」

「だといいんだけどなあ」

疑わしい視線が突き刺さる。

かといつて、何も言えないです。

「何、百聞は一見に如かずだ! さあさあ、時間が惜しいからもう出ようぜ!」

ここは俺の戦闘力を早々に見せつけて度肝を抜いてやろう。

街の近場なら大したモンスターも出ないだろうし、きつといけるはずだ。

「それじゃあ行つてきますねトトリ先生!」

「うん、いつてらっしゃい気をつけてね」

「はいー！」

飛び出すメルル姫とそれを追う二人、そして俺はというと。

「なあ、トトリちゃん。一本くらいフラムとかもらえたり……」

「アカネさん……」

「い、いや！ 冗談、冗談！ い、いってきまーす！」

後ろ暗く情けない交渉に失敗してから、三人を追いかけた。

## 上り坂

「……………」

俺は考えていた。

先導するアールズ三人組の中の一人、ライアス君、もつと言えばその右腕。

「……………」

銀の手甲と一体になった銃身、それとなく聞いてみたところ、炸薬の爆発の力で杭を打ちだす武器だそうだ。パイルバンカーだよなそれ、パイルバンカーじゃないか、パイルバンカーだよ！

カッコよすぎるだろ、俺が拳と足を振りまわしてた時にあつちはパイルバンカーだよ。

俺のフラムと格闘技を合わせた様な武器じゃないか、完全にアールランド時代の俺の上位互換だ。銃にコンバートしておいてよかったぜ。

「……………負けた気がする」

顔よし武器よし、おまけに美人の幼馴染が二人。

我が後輩、ジーノ君ですら顔良し、美人の幼馴染は一人だったというのに。

クソ、なんと羨ましい、もとい妬ましい奴だ。

不幸になればいいのに。

「ぬわっ!？」

「わあ!?! ライアス君!?!」

その俺の祈りが届いたのか、彼の頭上にウニが落下した。

思わず笑顔になってしまった。

「相変わらずライアス君は不幸というか……」

「お、俺は別に不幸じゃねえ! 偶然だ偶然、怪我也大した事ないし、早く行くぞ」

そう言つて何も気にしていない風に歩き出すライアス君。

なるほど、彼は生まれで運を使い果たしてしまったと言う事か。

少しだけ彼に対して優しくなれる気がした。

その後は特に問題という問題もなく、最寄りの、モヨリの森に到着した。

メルル姫が兵士さんを見つけて駆け寄ると、兵士さんは慌てたように声を上げた。

「ひ、姫様!?! どうしてこのような場所に……!?!」

「お腹がすいてるって聞いたからね。はいこれ、錬金術でつくつたパイだよ。これ食べ

て元気になつてね！」

お腹がすいていると姫がパイを作つて持つてきてくれるとは、良い時代になつたもんだ。

「おお、うまさうなパイだ！　ありがとうございませう姫様！　これでまたバリバリ働けます！」

そんなやり取りを傍目に、俺はしやがんで錬金術の材料を集めていた。

しかし、どこを探してもあるのは。

「雑草レベル、ゴミ、店で買った方がマシー！」

何これ、国を挙げて雑草の養殖でもしているのかというレベルだ。酷過ぎる。

ここで材料を集めて錬金術で何か作つて依頼を達成して、やっと紐生活からおさらばできると思つたら……。

「おい兵士A！」

「は、はい！　なんででしょうか！」

肩をいからせて近づいた、怒っています。俺は。

「なんで雑草しかないんだこの森は！」

「そ、それはその……じつは今この森ではプレイン草が大繁殖していて、役に立つ植物が全然取れなくなつてしまつて……」

「なるほど」

俺は大仰に頷いた。

「そうなんだ、アカネさん。どうすればいいかわかりますか？」

「当り前だ、俺を誰だと思ってる？」

軽く流し目を送ると、メルル姫の尊敬に満ちた眼差しが帰ってくる。

俺は良い気分のままに口を開いた。

「草が生えているなら抜けばいい！」

現実的に考えて百点、錬金術的に考えて零点の解答だと思った。

「しかし人手も足りないですし……」

「それじゃあわたし達が手伝うよ！」

ノータイムでこの回答を出せるメルル姫は開拓者の鏡だな。

「ひ、姫様にそのような事をさせる訳には！」

「いいのいいの、それが今のわたし達の仕事なんだから、よーし頑張るぞー！」

言うが早く、メルル姫は森の奥へと駆けだしてしまった。

護衛役のライアス君は当然、ケイナちゃんも兵士さんに一礼してから姫様を追い掛け

て、俺はというと。

「は、入らない?!」

摘んだ腕一杯のプレイン草をウエストポーチに入れようと奮闘していた。

考えてみると、昔はポーチがコンテナに直通だったが、今のポーチはただの一九八〇円のお買い得品だった。

俺はカゴに積んでもらうためにメルル姫を追い掛けた。

俺は呆然と見ていた。

「喰らえー！」

人參を持った兎さんのモンスターが出現して戦闘態勢に入った。

そしてライアス君が先陣を切った。

パイルバンカーで二体を一発で串刺しにした。

俺の出番はなかった。全ては過去系だ。

いや、いや違う！ これは彼らの成長のためにあえて見ていたにすぎない！

俺がレベル40としたら彼らなんて平均3くらいがいいところだろうしな、うん。

「はっはっは、なかなかやるなライアス君」

精一杯の先輩風だった。

「まあこれでも昔から鍛えてるからな、こんくらい軽いさ」

「うん、見違えたね！ 昔なんてライアス君わたしと喧嘩して負けて泣いてたのに」

「そ、そんなことあったか？」

若干の動揺が見られた。これはありましたと言っているようなものです。

「うん、それでルーフェスに泣きついたら姫様に手をあげるとは何事だつて怒られて泣いて、それをケイナに慰められてまた泣いて」

「う、うっさいな！ 全部お前の勘違いだ勘違い！ 口じゃなくて手を動かせ！ 日が暮れちまうぞ！」

「そ、そうだった！」

逃げるように作業に戻るライアス君。

意外と悲惨な幼少期だったのかも知れない。

「……………」

一方で俺とケイナちゃんは黙々と刈っていた。

あくまで俺の私見だが、ケイナちゃんはお花で冠とか作っている方が似合うと思う。むしろそうしてほしい、それを見ているだけで元気になれる気がする。

「——ん？」



なんとなく様子を見ていたケイナちゃんに突如陰が降りた。

地面が隆起してできた段差、その上には一匹の狼が鋭い目でケイナちゃんを狙って。

「ケイナ！」

「へっ？」

メルル姫が声をかけて、ケイナちゃんが上を向いたその時には狼が彼女目がけて飛び込んで。

「させるか！」

さしもの俺と言えど、ここで何もできないほど愚図ではない。

素早く飛び込み地面を強く蹴って、対空必殺夏塩蹴りをお見舞いする。

着地して奴を見ると、段差の上まで飛んで行ったようで、よろよろと森の奥へと消えていった。

「あつてよかつた夏塩蹴り」

うんうんと頷く、ついにこの技が日の目を見る日が来た。素晴らしい事だな。

「大丈夫かケイナちゃん」

「あ、はい。ありがとうございます」

ポカンとして顔のケイナちゃんの手をとって立ち上がらせる。

するとメルル姫が近づいてきて心配そうに顔を覗き込んだ。

「ケイナ大丈夫？」

「はい、アカネ様が助けてくれましたから」

「そっか、アカネさんありがとうございます」

「うむ」

視線がむず痒いので目を逸らしてしまう。

なんなんだこの空気は。

「胡散臭いと思つてたけど、歴戦の冒険者つてのは嘘じゃなかったみたいだな」

「うん！　すごかったよね、こうバシユ！　つていつてスパン！　つて！」

「はい、私も驚きました」

え、マジで何この雰囲気。

尊敬尊敬、さらに尊敬みたいなこの状態。

「――！」

そうか！　今の俺は上り坂つてことだ！

国仕えして自分のアトリエを持って、さらに今のコレ！

何をしててもプラスに働く、そんな人生の好況期。

「ま、まあこれが俺の役目だからな、当然の事をしたまでだ」

露骨に謙虚さをアピールしていく、ちよつといやらしい発言だとは思いました。

「やっぱり本職の人は違うなあ、わたしなんて目の前の事で手いっぱいだったのに、ちゃんと周りに目を向けて」

「気にするな、そのために俺がいるんだからな」

すみません、本当はお花で冠作るケイナちゃんを妄想してました。

しかし、この妄想さえも結果プラスに働いた、やはり今の俺は上り坂という事か。

「クツクツク、いざって時は俺に全部任せとけてことだー」

しかし俺は知っている、盛者必衰、特に俺の場合落とし穴はすぐに現れる。

そして尊敬が反動で一気に呆れへと変わる。

ふん、そう何度も俺を陥れられると思うなよ運命よ。

雑草を刈り終わるまでは何もなかった。

帰りも何も起こらなかった。

夜も何も起こらなかった。

快眠。

朝、心地よい気分で起きた。

「……………俺の時代か」

お城の一室、窓を開けて心地よい空気を胸いっぱい吸い込んだ。

ハロー、新世界。

俺はご機嫌で街を散策しながらトトリちゃんのアトリエに向いた。

「おは——」

扉に手をかけたところで思い出した。

俺はコンコンと二階ノックする。

「どうぞー」

するとトトリちゃんの声が返ってきたので挨拶をしながら扉を開いた。

「珍しいですねアカネさんがノックするなんて」

「ふふん、今日からの俺は新しいアカネ、言わばアカネスーパーだ」

健全な魂は健全な行動を創り出す。

うむ、グツバイバカな俺、今日から俺は普通の男の子に戻ります。

「あ、そうだアカネさん」

「うん？」

釜の前で四苦八苦とおぼつかない手つきで釜をかき混ぜているメルル姫が俺の方に顔を向けると、絞り出すように声を上げた。

「さつきルーフェスが来て、アカネさんが来たら執務室に来るようになって」

「ふむ、了解」

ちよつと早くに城を出過ぎたと思つたが、よくよく考えるとこの朝早くの時間から仕

事しているルーフェスさんは何者なんだ。

「もしかしたら、アトリエの件かもしれないな。そんじや来たばつかだけど失礼」  
「はい、また後で」

二人に挨拶をして、俺は浮ついた足で城に向かった。

俺のアトリエ、毎日仕事して、報酬をもらって、皆で日々を楽しく過ごせる。

素晴らしいな上り坂人生！

「失礼します」

俺は嬉々として執務室の扉を開け放った。

「おはようございますアカネ様」

「どうも、おはようございます」

相変わらず畏まったルーフェスさんに浮ついた気分が少し引き締まった。

「それで、どんなご用ですか？」

気分は誕生日だ。

開けてごらんと渡されるプレゼント、何が入ってるかわかっていながらも何だろうと  
言ってしまうあの感覚。

「そ、それが、その……ですな」

「……？」

珍しく言い淀んでいらつしやる。

何だろつか、場所が空かないとかそういう話なら少々残念だが仕方ないと――。

「まず、こちらを読んでいただければ、その後に説明させていただきます」

「はあ？」

なんだろうと思ひながら丸められた紙を手渡された。

紐解いて広げると、どこか懐かしい筆跡が。

「？ クーデリアさんから？」

目線をルーフェスさんに向けると、小さく頷かれた。

手紙に戻して上から下まで読む。

「――」

時が止まった。

トライアゲイン。

もう一度上から下まで。

「――!?」

もう一度二度三度、何度読み返しても内容は変わらなかつた。

内容の重要点を抜き出してみると。

『帰ってきたと思えば、アールズで錬金術士として働くらしいわね。無理だとは思うけ

ど迷惑をかけないように頑張りなさい。

それと忘れてないとは思うけど、あんたはギルドに七十万コールの借金があるわよね？

だから、そつちで働くのを認める代わりにあんたの報酬の八割はこれの返済に充てるように話をつけたから。

安心しなさい。必死に、馬車馬のように働けば生活くらいはできるわよ。たぶん。

追伸・私は今これを笑顔で書いてるわ。

あんたがいないのに借金が返済されていく、喜ばしいことね』

「……………」

悪意しかない追伸だった。

これはつまり、俺が千コールの仕事をしたら実際に手に入るのは二百コール？

ピンハネ反対、労働三権を要請します。

「マジですか？」

「はい、申し訳ありませんが、その条件で押し切られてしまい、力不足を恥じ入るばかりです」

ルーフェスさんを手紙で負かすとは、さすがはクーデリアさん。

しかし、そうか、俺って債務者だったな。

つまりギルドに所属しているだけの錬金術士じゃなくて、ギルドの所有物の錬金術士だったってことか。

上り坂？ ああ、錯覚だったよ。

「あの、アトリエの方は？」

「それは勿論用意させていただきました。しかし、アカネ様がその条件に納得なされないのであれば……」

強制送還になると。

なるほど、向こうならある程度報酬にも融通がきくだろうけど。

「分かりました。やります、ええやりますとも」

トトリちゃんのない場所は耐えられません、折角メルル姫とかケイナちゃんとかも仲良くなれたのに、ここで帰ってはアカネの名が廃る！

「では、後ほど案内させていただきますので、客室の方でお待ち下さい」

「はーん」

返事をして執務室を出る。

そして膝を地面に着いた。手も着いた。

借金とクーデリアさんの鎖は決して千切れないと知った。



## イメージチエンジ

俺は抜け殻の様になっていた。

あの後案内された俺のアトリエ、職人通りを進んだ先にあり、外観はアーランドの師匠のアトリエに似た一階建ての平屋。

暗めの青い屋根からはアトリエの壁と同じように石造りの煙突が伸びている。

やったーと喜びたいかったが、債務奴隷状態に陥った事に気づいてしまったためにアングル・トムの小屋にしか見えなかった。

仕事についてくわしく聞いてみたところ、国からの仕事は報酬の八割が借金返済に、アーランド時代と同じように直接ギルドから受ければピンハネはなしだそうだ。

俺一人ではどう頑張っても不眠不休は免れない。

職人通りを適当にぶらつきながら、どうしようかと思いを巡らせていると。

「む……………すげえ組み合わせだ」

四叉路のちょうど交差点にいらっしやるはルーフェスさんとおやつさんことハゲルさん、そしてペーター。

この混沌とした組み合わせに俺という名のハバネロ暴將軍を投下したら凄まじい事になるだろう。

そう思い至ったので、俺は片手を振りながら駆けよった。

「おやつさん！ ついでにペーター！」

「お！ 兄ちゃんじゃねえか、久しぶりだなおい！」

「なんだ、お前帰ってきてたのか」

カラカラと快活に笑うハゲルさんと、相も変わらず覇気のないペーター。

トトリちゃんに続く知り合いとの再会がまさかこの二人になるとは思わなかった。

「それでルーフェスさん、どうして二人が？」

「はい、このたび開拓事業の一環として我が国にアールランドから武器屋を誘致する事に致しまして」

「なるほど、それでペーターはただの御者役と」

しかし、アールランドが誇る二柱の創造神の内の一柱を呼びこむとは……アールズの開拓事業は本気とみえるぜ。

「まあそりゃ俺はただの御者だからな。つと、そうだお前がいるならちようどいいな、ほ

いこれ」

「こや？」

ペーターが手から吊るしていた、手の平サイズの小汚い麻袋を手渡された。なんかもぞもぞと動いている……。

「え？ マジで何これ？」

「いや、俺もよくわかんねえんだけど、こつちに来る途中で急に飛び乗ってきたんだ。確かに渡したからな、んじゃ、俺はこれで」

「……？」

埒が明かないので紐を解いて、袋を逆さにしてみると、何か白いものが落っこちた。「すげえ！ でっかい大福が入ってた！」

「ぶにー！」

「——グフツ!?!」

久しぶりにボデイにヘビーなのが叩きこまれた、がなんとか踏みとどまれた。

軽いボケでこれとは、久しぶりじゃなかったら第四次大戦が起きているところだ。

それにしても手紙出してまだ三日と経っていないだろうに、読んですぐに馬車を追いかけてくれたのか、嬉しくなってしまうじゃないか。

「ぶにー！」

足元には変わらぬ平和そうな顔が。

俺の翻訳アプリケーションが錆びついていなければ、こいつは今、再会の握手代わり

だぜと言った。

渋すぎる。

「あ、アカネ様!? ご無事ですか!?!」

「へ?」

腕で俺を後ろに下がらせながら、ルーフエスさんが俺とぶにの間に入った。

「ペーターさん、何故モンスターを街の中に——!」

あれ? ルーフエスさんご存じない?

「あの、ルーフエスさん」

服を摘んでちよいちよいと引つ張る。軽く視線をこちらに向けてきたので、なるべく

やんわりと伝えた。

「そのぶにぶに、俺の相棒です」

「はこ?」

素つ頓狂、というには落ち着きすぎた声が上がった。この人からしたら十分に珍しい類のものではあるのだろうけど。

「聞いてませんか?」

「い、いえ、噂には聞いてます。アカネ様には恐ろしく腕の立つ用心棒が傍にいます」

「ぶ、ぶにぶに」

ぶにが怪訝な顔をしている。そりやそうだ、用心棒つて、こんな容赦ないツツコミを入れる用心棒がいてたまるかと。

「シロつていう名前で、俺のベストパートナーです」

「ぶに。」

胸を張るように体を反らせるぶに、それを見たルーフェスさんは眉をひそめて。

「そ、そうですか、この方？ いえ、この方がアカネ様の……」

びつくりするくらい動揺していらつしやつた。

しかしさすがというか、次の瞬間にはもう落ち着きを取り戻していた。

「失礼いたしましたシロ様、私、アールズ王国の執務官のルーフェスと申します」

「ぶ、ぶに。ぶにぶに」

ルーフェスさんの見事に畏まった挨拶に、ぶには今まで見たことないくらいにぺこぺここと頭を下げていた。

やはり我が相棒、俺と同じでこの類の人には慣れていないようだ。

「心から受け入れるにはまだもう少ししばらく時間が必要ですが、国を超えて届く武勇、是非頼らせて頂ければ幸いです」

「ぶ、ぶに。ぶにぶに」

任せて下さいと飛び跳ねるぶに、テンパリすぎである。

これがメルル姫辺りなら、スパツと受け入れてもらって終われるだろうに。

「それでは騒ぎになる前に国民にシロ様の事は伝えておきましょう、何か問題が起こったら執務室までお越しください」

「ぷ、ぷに〜」

城へ戻るルーフェスさんをぷには深々とした礼、人間で言うところの土下座レベル、顔を地面にこすりつけて送り出した。

「敬われるとやりづらいよな」

「ぷに」

意気消沈と言った様子で俺の方に飛び乗ってくるぷに、気持ちは痛いほどわかる。

「相棒がモンスターだと難儀なもんだなあ」

「いやまったく」

「それにしても兄ちゃん、どうしてまたこんな所にいんだよ？ 帰ってきたって知りや

マー坊が会いたがるぜ？」

マークさん、俺もできることなら会いに行きたい。けれど。

「実は俺、アールズに錬金術士として国仕えしまして、しばらくは会いに行けませんよ」

「あの兄ちゃんが国仕えええ!？」

目をカツと見開いて、大口開けて、とても驚かれた。

「かあつ！ 人生何があるか本当にわかんねえな、あの兄ちゃんが国仕えたあ」  
「俺も人生少しは考えてるって事ですよ」

借金まみれではあるけれど。

「しっかし、となるとなあ……」

「……？」

おやつさんの目が俺の頭のとっぺんからつま先まで行ったり来たりして。

「いくらなんでも一国の錬金術士様にしちゃみずぼらしすぎやしねえか？」

「む、た、確かに……」

黒ジャージのままでは威厳とか箔がつかないかもしれない。

かと言って、師匠のエキセントリックなセンスに負けるのも嫌だった。

「よし！ 兄ちゃんの景気づけにいつちよ作ってやるか！」

「え、マジですか」

「おうよ、入れ入れ」

おやつさんの漢らしい背中に導かれるままに、店の中に入ると武器屋特有の炉の熱気が……。

「あれ？ 涼しめですね」

「ぷい」

「ああ、ちつとまだ火力が足りねえんだ。まあしばらく使い込まねえことにはどうしようもねえな」

創造神ハゲルはその炉の火を以てあらゆる金属を溶かし千変万化に形を変えらうのに、まさか肝心要の炉がその状態とは、少し残念だ。

「材料を少しは持ち込んだからな、よっし、んじやあ兄ちゃん服を脱いでくれ」

「ういっす」

おもむろにジャージを脱ぎ、服作りが始まった。

.....

.....

「ばねえ」

「ぷい」

さすがはハゲルさん、立体裁断なんてお手のもの、型紙いらずだった。

夜な夜な少女趣味の可愛い服を縫っているだけあり、針の動きが見えなかった。

「一時間程度で出来上がるとは……」



「ぷい〜……」

世の中の服飾関係の人に喧嘩を売っているとさえ思える。

しかし一時間で上下セットで服を作ったと話しても鼻で笑われるのが落ちだろう。

「よし！ これで兄ちゃんもちったあ様になるだろ！」

「それじゃあ失礼して」

着なおしたジャージを再び上から脱ぎ、下を降ろす前に畳んで置いておこうとする。

突然扉が開いて。

「こんにちわー、お邪魔しまーす」

メルル姫が入ってきた。

「にや、にやああああああ!？」

「うわっ!? ア、アカネさんなんで裸なんですかあ!？」

反射的に脱いだ服で上半身を隠した。

ま、まさかこのアカネがラッキースケベの対象になるとは、一生の不覚!

「と、とにかく着替えたら声掛けるから!」

「し、失礼しましたー!」

大きな音をあげて扉が閉まる。

俺の心臓は爆発寸前なくらいにドキドキと早鐘を打っていた。

「なんだあ、あの嬢ちゃんは？」

「ああ、トトリちゃんの弟子ですよ」

着替えつつ、なんとか平常心を装って答える。

実際は気を抜いたら飲み込んだ心臓が口から出そうな状態です。

「へえ、あの嬢ちゃんの弟子か！」

「ぷに〜」

二人ともあのトトリちゃんがと感心したような様子だった。

「つてことはあれが噂の姫嬢ちゃんか」

「ええ、そうですねっと」

なんだかだんだん文明人らしい格好になってきた気がする。

「ぷに??」

「いや、マジの姫だ。お姫様がトトリちゃんの弟子なんだよ」

「ぷに!!」

驚愕のぷに、確かによくよく考えてみるとすごいことだよな。

「よつと……………どうよ、似合うか？」

腕を広げて見せつける。

明るめのワインレッドのシャツの上に、金色のボタンで彩られた腰下まで丈のある黒のベスト。

下はベストと同色の黒いズボン、いや今時はパンツって言うんだっか？ それを白いベルトで固定している。

「おう、見違えたぜ」

「ぶに」

「うむ」

長き時を共にしたジャージともさらばの時、よくよく考えてみると青春の時代を俺はジャージだけで過してたんだよな。

あらゆる意味において考えられない事だな。

「初めて文化人になれた気がする」

「でも兄ちゃん、ネクタイ忘れてるぜ？」

「——っ！」

ドキンと心臓が跳ね上がった。

そう、黒いネクタイを締め忘れていたが、就職なんてものと無縁の人生を送ってきた俺にそんな物の結び方分かるはずもない。

当然ジャージマンなのでおしゃれのワンポイントとか知らぬ存ぜぬで生きてきた。

となると結果的におやつさんがつけるだろう。

誰得なシーンが流れてしまう。

「は！ メルル姫、入っていいぞ！」

お姫様なら、なんか高度な教育の一環とかで学んでいるかもしれない！

「はい……わっ！ アカネさんが変身した!？」

「いや、変身は違うだろう」

言いたい事は理解できるが。

「ところでメルル姫、ネクタイの締め方とかわかるか？」

「え、わかる訳ないじゃないですか」

俺の計画がガラガラと音を立てて崩れた。

「なんだ、兄ちゃん知らねえのか？ しゃあねえな、俺がつけてやつからこつち向きな」

「……………はい」

——あ、ハゲルさんの顔が近い。

トトリちゃんのアトリエにて。

「わあ、アカネさんがおしゃれになった。カッコイイですよ！」

「……うん、ありがとう」

トトリちゃんの真つすぐな笑顔に癒された。

……大切なものを失った心の傷によく染みるぜ。

「そういえばぶにがこっち来たぜ」

「え、そうなんですか？」

「うむ、今はメルル姫の玩具になってるんじゃないか？」

姫はぶにことをえらく気に入った様子だった。

撫でて伸ばして引つ張って、可愛い娘にいじられてぶにも満更ではなさそうだったが。

「それでトトリちゃんに聞きたいんだけどさ」

「はい？　なんですか？」

「この格好なら弟子にならないかって声かけても怪しくないよな」

「えっと、そうですね。前の黒ずくめよりは」

よしよし、トトリちゃんのお墨付きもでた。

今もメインは黒だが、前よりは十分に見栄えもするだろう。

「よっし！ アトリエよし、相棒も来た、となれば残るは弟子のみ！」

「アカネさん、どういう人がいいですか？」

「とりあえず可愛い娘！」

俺は言い切った。

アールズから少し離れた場所で、ペーターの物とは違う馬車が走っていた。

その中には横に置いた明るいチェツクのトランクケースと同じように揺れている、美しい白い髪の少女が一人、胸を時めかせて、灰色の目で見知らぬ土地を窓から眺めていた。

彼女に不運な点があるとすれば、どこかのバカが言うところの可愛い基準に当てはまっている事だろう。

## 一番弟子

馬車に揺られてもう数週間、遠いアーランドの地に至るまでの旅路の合間、私は一度ここアールズ王国で馬車から降りて歩みを止めた。

数日前から目眩が酷くなっていた。きつと旅疲れ、だから休もう、久しぶりに、お布団で。ここまで来たら家出娘を追いかけるのもあきらめているはずだもの。……たぶん。

宿を探して木の葉越しの鈍い陽光が射す並木道を歩く。

少し私には大きすぎるチェツクのトランクケースを前に持って、続く目眩に気だるさを覚えて俯きながらもゆっくと。

歩いているときは無駄に考えすぎてしまう、例えば、勢いで家を出てきたけれど、アーランドまで行って私は何がしたいのだろうか、なんて。

「……んっ」

その時、一陣の風が吹いた。

葉と葉を擦り合わせる音が鳴り響き、私の目の前を若々しい色の葉っぱが風に乗って



飛んで行った。

顔を少し上げ、その行く末を見ると、ふとある人が目にとまった。

黒髪で同じく黒いネクタイを締めた高身長男性が、きのこの様な屋根がついた木の下で、大きな釜をかき混ぜている。

なんだろう横にあるあののぼりは。

弟子歓迎？

単純な好奇心からか、私は不調も忘れて近づいて行った。

すると、釜の中が彼の持っている杖を中心に輝いていつて――。

ボンって音と一緒に爆発が――。

ぶにが帰還した翌日、四月も上旬を越えて落ち着く暖かさがひろがって、今日も和やかに俺とぶに、そして姫とメイドとトトリちゃん。

皆でトトリちゃんのアトリエでテーブルを囲んで和やかにクリームたっぷりケーキを食べながらお茶会を……。

「つて違う違う！」

「わっ、何ですかアカネさん。突然大声あげないでくださいよ」

「なんでこんなお昼のティータイムを過ごしてるんだ！」

弟子とか弟子とか弟子とか、もつとやるべきことがあるだろうに！

「えつとシロさん、ケーキが好きなようでしたから」

「ぶにー！」

メルル姫の横に控えたケイナちゃんがそう言うのと、ぶには高らかに肯定した。

俺の居ぬ間にケイナちゃんとまで仲良くなるとは、それもこんなおいしいケーキをぐちそうしてもらえて……。

「こんなおいしい！ くっ！ おいしいケーキを！」

フォークで刺してぱくりと食べれば舌の上で優しい甘みが、続けてもう一口、さらに、なくなったので腕を伸ばして姫の皿から取って食べようと。

「ちよ、ちよつと!?! アカネさんわたしのケーキまで食べないでくださいよ！」

「減るもんでもないだろう」

「いやいや、すごい勢いで減りますから！」

突き刺さる寸前、見事にフォークでガードされてしまった。

壮絶な鏝迫り合いが繰り広げられる。

「メルル姫なんてお姫様なんだから昔からこんなうまいの食ってたんだろう？ 俺なんてしけた。パサパサのスポンジケーキばかりだったんだぜ？」

「嫌ですよ！ わたしケイナちゃんの焼いたケーキ大好きなんですから！」

何と、これはケイナちゃんの手作りだったか。

メイドさんの手作りケーキ……………男の永劫の夢！

「富める者は貧しいものに施すものだ！ これって王族の義務じゃないのか!？」

「ぶにゅ」

屁理屈とか言うんじゃありません！

「それなら目上の人は年下に譲るものじゃないですか!？」

「ぐぬ……………」

押しでは引いての繰り返しが永遠に続くかと思われたが。

「二人とも、行儀が悪いですよ!？」

「す、すみません」

鶴の一声により、強制的に黙らされた。

「アカネさんどうしたんですか？ いつにも増して情緒不安定な気が……………」

見かねた様子のトトリちゃんがそう問うてきたので、俺はぼそぼそと小さく喋った。

「……弟子ができるか、教えられるかとか……不安、なりけり」

できるまでにはいいとして、自分の師匠を省みると、教えられるかすごい不安。

するとトトリちゃんは笑って。

「大丈夫ですよ、アカネさん面倒見がいいですから、きっと良い先生になれます」

「だと良いんだけどなあ、ところで弟子ってどうやって作るの？ 粘土？」

「ね回すの？」

「えっと、わたしの時はメルルちゃんがアトリエに来て……」

「それでわたしがトトリ先生の錬金術を見て、すごい！ って思ったんですよ、これなら

きっと何かが変わるって！」

「なるほど」

と言われても、俺のアトリエにわざわざ来る暇人はいないだろうし……。

「そうだ！ アカネさんが街で実際に錬金術を試してみればいいんじゃないですか？」

「……………」

メルル姫は意外と切れ者なのかもしれない。

「よし、やってみるか！」

「ぷんー」

俺が立ち上がるとぷにが肩に飛び乗ってきた、なので掴んで床に放り投げた。

「お前がいたら近寄りづらいだろう」

「……ぷに」

珍しく素直に肯定してきた。

と思えば、次はメルル姫の横に座っていたケイナちゃんの膝に飛び乗った。

「ぷに〜」

「あら、シロさんったら」

「……………」

すりすりしていた。ケイナちゃんもまんざらじゃなさそうだった。

相棒、ペット感覚だからな、それは。

悔しくなんてない、悔しくなんてないが、羨ましい。

いつかぷにと精神を入れ替える薬を作ろう、そうしよう。

「トトリちゃん、初心者向けの本ちよつと借りてくんな?」

「あ、はい。いいよねメルルちゃん?」

「平気ですよ、そこら辺はちゃんと覚えましたから」

本棚から本を取り出す傍目にメルル姫を見ると、大変に得意げな顔をしていらっ  
しやっただ。

あの子もあれで優秀な子だよな。

「よし、行くか!」

「ぷにー!」

頑張れと言われた。無視した。

並木通りの中心で俺は釜をかき混ぜていた。

さすがにアトリエの釜は持ち出せなかつたので、近場で少し小ぶりな一般家庭レベルの釜を借りて、ついでにおやつさんのところから余った布の端材をもらってのぼりも作ってみた。

「兄ちゃん、なにできんだこれ?」

「まあ見てろ」

年二桁になるかならないかの少年A、興味を持ってもらえて嬉しいが君は弟子対象外だ。

ちなみに今作っているのは飴ちゃん、駄菓子屋によくあるいちご飴。

これなら何を間違っても失敗のしようがない。

かき混ぜ続けて、よしもうできると思ったその時。

強い風が吹いた。

葉っぱが大量に釜に投下された。

釜を混ぜる腕が震えた。

「ちよ、ちよつと下がってね」

集まつてきた人たちを俺は片手で離れるように合図した。

冷や汗が止まらない、少し視線をあげると白い髪の毛のキュートな娘がこつちに寄つてきていた。

やめてください、今からの俺を見ないであげてください。

祈りも空しく、少女は人の輪の中に入って、次の瞬間には小さな爆発音が。

「ゲホッ、ゴホッ！」

小さな釜のおかげで爆発も小さく済んだが、見事に顔が煤まみれになってしまった事だろう。

……………死にたい。

「うっわーすげー！」

「すごいなあ」

「うん、派手だった」

煙が晴れるとやんややんやと民衆が沸き立った。

材料を入れていた足元のカゴに次々とコールが投げ込まれていく。  
やめてください！ これ大道芸とかそういう類の見世物じゃないから！  
でもお金は入れて、生活苦しいから！

「ど、どうもどうも」

俺は営業スマイルでひらひらと手を振った。

何かを言う気力もない、今日は小金を稼ぐ日だったと思おう。

忌むべきは葉っぱ、ひいてはメルル姫、何故俺は彼女の甘言に踊らされてしまったのか。

間もなく人の輪が崩れて解散し、俺も帰ろうと思ったが。

「……………」

さっきの白い髪の子が一人、ぽつんと灰色の目で俺の事を見ていた。

と思えば、近寄って来て、白いハンカチを取り出すと。

「使いますか？」

「あ、これはどうも」

煤だらけの顔を晒すのもあれなので、ありがたく施しを受けて顔を拭う。

シルクの感触が顔に心地よい……。

……シルク？ 絹？ 高級品？



「シルク!」

「え、そ、そうですけど」

何か悪い事をしましたかとも言い上げた顔で俺を上目で見上げる少女、何も悪くはない、むしろすごい良いことしてるよ。

「煤拭うのはもつと荒い生地ハンカチで良いと思います」

「……? ハンカチってシルク以外にあるんですか?」

「……………」

瞬間的に理解した。どこぞのお嬢様かと。

「……とりあえず、あまりに申し訳ないから少し待ちなさい」

「はあ?」

気の抜けた声で相槌を打つ彼女の前で、俺は余った材料の苳や砂糖を釜に入れ、杖を突っ込んだ。

「言っておくと、俺がやりたかったのは爆発なんてことじゃない」

「え、そうなんですか?」

「そうなんです」

俺は爆発させるのは好きだが、爆発するのは嫌いだ。

「ところで名前は? ちなみに俺はアカネです」

「はい、リリイって言います」

「なるほど、リリイちゃんねっと」

さつきまでは大人数に配るつもりで作ったから少々時間がかかったけれど、一人分とあらば時間もいらない。

釜が光り、中で小さく弾ける音がする。

釜に手をつ突っ込めば、握られるはいちご飴。

「ほらできた」

「……………」

彼女は目を大きく見開いてパチパチと瞬かしていた。

改めて見ると、どこか猫の様な雰囲気を感じさせる風が目がつり上がっている。

「ほれ」

「——はむっ!?!」

彼女の口に飴を押し込むと、また目を見開いたと思えば、俺の事を真つすぐ見つめて。

「甘いです」

「そうだろうそうだろう」

俺は大きく頷いた。

汚名返上、名誉挽回、これでこの街でまた彼女に会っても俺は爆発大道芸人の評価を

されずに済む。

「これで錬金術、なんでも作れる不思議な力」

「なんでも……」

そう呟いた彼女の視線は俺から俺の横に動いた。

俺もそつちを向くと、そこには煤で薄汚れた弟子募集ののぼりが……。

!?

まさかのさかさま、かさまさか!?

「私でも……?」

「もちろんだ」

頑張って真面目な顔を保って俺は首を下から上に動かした。

気を抜くと、ふひい、とか嬉しさのあまり変な笑いが漏れそうだ。

ありがとうメルル姫、やっぱり王族は何か持つてるな。

「何か、変われますか?」

「うん? まあ、俺は変わった……な」

錬金術を学ばなかった俺を想像できないくらいには。

「わ、私に……」

彼女はカバンの取っ手を固く握りしめると、大きく頭を下げて。

「私に錬金術を教えてください！」

錬金術士アカネの一番弟子が誕生した瞬間である。

嬉しさのあまりに気を失いそうだ。

「お、俺でよければ、な」

頑張つてクールな態度を装つてみた。これでさっきの爆発さえなければ完璧だったろうに。

「あ、ありがとうございます！」

顔をあげると、リリイちゃんは初めて笑顔を見せた。

トトリちゃんにも劣らぬその眩い笑顔に、これは夢かと一瞬疑つてしまった。

「よし、それじゃ早速俺のアトリエに招待しよう」

「は、はい……………」

「にゃ!？」

突然後ろにふらついた彼女に、威厳も何もない声をあげつつも駆け寄つて後ろから肩を掴んで支えた。

「だ、大丈夫か？」

「は、はい。すみません、長旅で少し体が……」

馬車酔いなら俺の同志だが、この様子だと単純に体調が悪いだけだろう。

「そんなじゃあおぶさつてあげるから乗りなさい」

「え、えつと、その……はい」

背中を見せると躊躇いつつも体を預けてくれた。

信頼感だったら良いなと思いつつ、足を動かさないくらいに辛いんだろと冷静な判断をしよう。

トランクケースを片手で持ち上げ、俺はアトリエに向かって歩き出した。

釜を返すのは、まあ、後でも良いだろう。

リリイちゃんは途中で寝てしまったので、アトリエのベッドに寝かせて、俺は軽い置き手紙を書いて、トトリちゃんのアトリエに出向いた。

「あ、アカネさんお帰りなさい。どうでした?」

「あ、ああ、うん、なあ、メルル姫……ちよつと俺の事叩いてみてくれないか?」

決して俺は頭がおかしくなった訳ではない。

「い、嫌に決まってるじゃないですか!?!」

「そ、それじゃあトトリちゃんでもいい!」

「ええ!？」

俺がトトリちゃんに詰め寄ると。

「ぷに!？」

「——がはっ!？」

顔面にバレーボールを受けた時の事を思い出す、そんな思い衝撃が顔全体に響いた。

そしてそのままソファに倒れ込んで、顔をクッションに埋めた。

「うへ、うへへへ……ふひい」

「あ、アカネさんがおかしくなっちゃいましたよ、トトリ先生?」

「えっと、たぶん何か良いことがあつたんじゃないかな?」

さすがトトリちゃん、よく分かっている。

「ぷに?」

「ああ、夢じゃない、現実だった……」

ハイパー美少女が俺の弟子に……!

「よし! 頑張つて威厳を保つぞ!」

「ぷに……」

嘘でも頑張れと言つてほしかった。

## はじめてのおつかい

薄く目を開くと、覚えのない天井が目に入った。一般的、たぶん一般的な板が張り巡らされているだけの質素な物。

真新しく感じる布団をよけて立ち上がる、ここはどこだろうと辺りを見回した。

すると、私が今立っているロフトから視線を少し下げた所に大きな釜が二つ。

思い出した。

私はあの不思議な七色の輝きに魅せられて、考えるよりも先に口が開いていて。

でも、それを間違っているなんて、私は思っていない。それに錬金術という力を信じている。

「そうよね、リリイ」

小さく自分に告げ、気持ちを新たにす。

まずはあの人が来るのを待とう、私に錬金術を教えてください。体格に反して紳士的な印象のあの人……なんて呼んだらいいんだろう。

先生、とかかしら。

よっぽど失礼にならなければ良いとは思うのだけれど、きっと彼も気にしないわよ

ね、きつとそうよね？

俺は悩んでいた。

職人通りを歩きながら、ぶにを肩に乗せて、悩んでいた。

「うゝむ、師匠、はたまた親方？」

「ぶにゝ……」

どうでもいいみたいな声出すなよ。

「最重要ポイントだろ」

呼び方って言うのは重要だ、これを怠ると悲劇が待ち受けている。

「ぶに？」

「いや、先生はトトリブランドに譲ろうかと思つてな」

俺は俺のアカネブランドを確立させていきたい。

「いつそご主人様、とか？」



「ぶ、ぶに?」

「いや、だつて弟子がなあ……」

上目遣いでご主人様、ここ教えてくれますか? なんて……。

「大興奮だな」

「ぶに……」

冷たく、蔑んだ目で見られた。

いいさいいさ、俺の同志は世界にたくさんいるんだ。

「ぶに」

「そんなことより仕事か……仕事か」

昨日は城に泊り、そして今日、ルーフェスさんから直々に初仕事をもらつてしまった。

花火フラムを五個、それで報酬は3000コールの引かれて6000コール。

単価1200コール……。

「リリイちゃんには、俺の弟子には隠し通さなければ……!」

借金まみれのぐうたら師匠だと思われたくない……!」

ぐうたらな師匠なんてどこの世界で存在を許されるんだ。

「まずはぶにの紹介を軽く済ませんとな」

「ぶに」

ちらりと横目で我が相棒を見る、そこそこ愛嬌のある姿をしているが、もしもリリイちゃんが嫌いと言ったなら。

「俺はお前を容赦なく野に放つからな」

「ぷに？」

「あ、いえ、嘘ですごめんなさい」

ぷにに凄まじながらもついにアトリエの前まで来た、半ば反射的に扉をオープンしそうになったが、アールズ版アカネは違った。しっかりと二回ノックをした。このノックだけでも常人では生涯辿り着けない領域だろう。

「は、はい！ どうぞー！」

透き通った声が返ってきた、実のところ、今の今まで全部夢だと若干疑っていた。

だって、だってさあ。

ゆつくり扉を開くと、律義に扉の前で待っていたのか、リリイちゃんは薄く微笑んだ顔をこちらに見せて。

「おはようございます、マスター」

なんて、挨拶してきて、ね。

すげえ、礼儀良し、容姿良し、笑顔バッチリ……生きてると良いことあるもんだな。

それにしてもマスターって、マスターって、そこだけ録音して延々と再生したいです。

「あの、マスター？」

不安げな様子で瞳を揺らしながら、こちらの顔を伺ってくるリリイちゃん。口には出せないが、感動で俺の中の時間が止まっていた。

「あ、ああ、おはようリリイちゃん」

と返事を返したところで、彼女の目線が俺の肩に移っている事に気付いた。

俺は極めて好青年風の笑顔を浮かべてぶにに目をやった。

「こいつは俺の相棒でシロって言ってな、モンスターながらに良い奴だ」

「ぶに？」

誰だお前とか言うんじゃない、振り落とすぞ。

「相棒？」

「ぶにー！」

ぶには肩の上で飛び跳ねると、僅かに頭を下げるような動作をした。

するとリリイちゃんも上目でぶにの様子を見ながら小さく一礼した。

もはやその動作ですら可愛い、ご飯三杯どんと来い。

と言うか、本当に来てください朝ご飯まだです。

「よし、朝食作るか！」

「は、はこ」

意気揚々と奥の部屋のキッチンの中に入り、樹氷石の入った冷蔵庫から昨日ぶにと仕事して買っておいいた食材を取り出して、作った。

リリイちゃんも頑張ってくれた、けれど、人参の皮を剥く時に包丁がスパツと彼女の親指の上を勢いよく通過したのを見て、俺の心臓は十個くらい潰れた。

なのでトトリちゃんから借りてきた初心者向けの参考書を読んでいるように言った。相手はおそらくお嬢様だという事を忘れてはいけない。最近メルル姫とか言うバイタリテイに溢れすぎたお姫様のせいで感覚がマヒしている。

ドキドキのクツキングタイムを終えて、サラダとトーストを四角いテーブルに載せて朝食タイムかと思つたが、リリイちゃんの顔が暗かった。

「ど、どうしたんだ？」

「い、いえ、すみません、本来なら私がやらなくちゃいけない事なのに……」

……確かに家事とかは弟子がやるのが一般的な価値観かもしれない。

しかし、我が口口ナ師匠があんな感じの年上とすら思わせない様な人だったから忘れていた。

実際俺も全然気にしてないし、ここはそれとなく伝えてあげよう。

「いや、俺の趣味は料理だから、師匠の楽しみを奪わないでくれよ?」

「え、はい」

少し面喰ったような表情をするリリイちゃん。

なんかキザったらしい台詞だった気がする、おふぎけを真面目にやってしまったみたいなの……。

「ぷんっ。」

誰でもなく、俺はアカネだつて。

「それじゃあ朝食を……」

「あ、あのマスター、ちよつといいですか？」

「に、な、なんだ？」

危ない、危うく『にや？』なんて締まらない返事をするところだった。

習慣と言う物は本当に恐ろしい。

「そ、そのマスター私の事子供扱いしてませんか？」

「な、何故？」

「だつてマスターみたいな大人の男性がちゃんづけだなんて、私これでも16なんですよっ。」

「む……」

大人しい子だと思っていたが、意外に主張はちゃんとできる子だったか。

確かにいままで年下っぽい人はちゃんづけオンリーだったけれど、拒否感示す子がい

でもおかしくはないか。

むしろトトリちゃん辺り、実は俺の事ちゃんづけとかキモイなんて……。

早々にアンケートを取ろう……。

「それじゃあ、リリイ……で平気か？」

さん、ちゃんがないと非常に自分の言葉ながら違和感がある。

かといって師匠や後輩君の様に、弟子なんて呼び方は味気ない。

「は、はい、大丈夫です」

「よし、それじゃあご飯にしよう」

「はい、いただきます」

「いただきます」

「ぷい」

ぷにはさながら掃除機の如く一瞬で吸い込んだ。

協調性と言うものを知らないのだろうか、知らないな。

見ろリリイちゃん、もとリリイのあのちまちまとトーストをかじる姿を、小動物か何かかと、むしろ小動物がリリイだと言いたくなる。

メルル姫なんてケーキを口に入れながらも平気で話をするが、家の子はなんて上品なのか、食べながら喋ったりしない、でもマスターちよつと寂しい。

そんな風に朝食をとって、リリイに手伝ってもらいながら片づけを済ませて、釜の前に立ったからさあ錬金術のお勉強……。

「なんていう風にはなりません」

「な、なんですかマスター？ 急に」

しまった、ぷになら色々行間読んでくれるから俺の唐突な発言にもついてきてくれるがリリイはそうもいかない。

俺はまだ立派なマスターでいたい、うまく取り繕うぜ。

「いや、早速錬金術を実践しようなんて思ってるんじゃないかと思ってな」

「？ 違うんですか？」

両手で持った本で口元を隠しながら小首をかしげるその姿、可愛さがあふれている。

実のところ、俺はこの子を十秒に一回は可愛いと思っている。

「錬金術には材料が必要です、そしてそれは街の外に行つて自分で採るのです」

「そ、そうなんですな」

「うむ」

このもつともな発言の裏には、コンテナが今現在空に近いという背景がある事は俺だけが知っていればいい。

「と言つても、俺は今日仕事があつてな」

「……………え？」

そんな捨てられそうな子犬みたいな表情しないでください。仕事がどうでもよくなりそうです。

「この街には俺の姉弟子がいて、俺と同じように最近弟子をとったからその子と一緒に行ってもらおうかと思っただが……………」

俺も一緒の方がいいかと目で問う。

「いえ、大丈夫です。なんなら一人でも平気ですよ、これでも子供のころはよく外で遊んでましたから」

「そ、そうか」

力のこもった目でそう言い返された、健気なところを見せられるとまた心が揺らいでしまう。

「しっかし……………」

彼女の指先をまじまじと見る、白く細い、ありがちだが白魚のようななんて表現されるのがしっくりくるような、傷一つない綺麗な指だ。

「よくよく考えてみるとお嬢様に採取させるって言うのは……………」

「え？ あ、あのマスター？」

「にや？ な、んだい？」



セーフかアウトで言うならたぶんセーフ。

リリーの焦ったような声に俺まで焦ってしまった。

「わ、私の家の事知ってるんですか？」

「えっと、良い所のお嬢様かなくらいに」

言動とか、服とかも完全特注のハンドメイドっほいし、どう見てもねえ。

「そ、そうですか……そ、その……私、実は……」

顔をうつむかせて小さくぽつぽつと言葉を紡ぐそういう姿、アカネさんは好きじゃないです。

「別に言わなくてもいいって、問いただしたつもりもないから」

「……………」

本当にいいんですか、と遠慮がちに視線を下から送ってくる彼女に俺は大きく頷いた。

「人には誰にでも隠し事の二つや三つあるからな」

俺なんてアーランドで数年も延々と隠し通しだったし。

「まあ月並みだけど、言いたくなかった時に言えば良いさ」

「は、はい」

ほっとしたような頬笑みを浮かべるリリーを見て、止めて良かったと思った。

一方で床にいるぶにからはカツコつけんなど言う視線がチクチクと突き刺さる、別に悪いことではないので痛くも痒くもない。

「よしそれじゃあ心機一転、出かけよう」

「はい、その……マスター」

「うん？」

「いえ、なんでもないです」

そう言つて、ニコニコと会つて一番良い笑顔を浮かべて悪戯つ子のように笑う彼女の姿を見て俺は。

……正直鼻血が出そうになった。ぶにの視線が痛かった。

場所は変わつてトトリちゃんのアトリエに。

リリイは重そうなチェツクのトランクケースを持っている、採取した材料を入れるらしい。なんでもこのカバンが一番手になじんでいるとか。

軽くノックすると返事が返ってきたので中に入ると、メルル姫とトトリちゃんが近

寄ってきた。

「わあ、この子がアカネさんが教える子ですね」

トトリちゃんが楽しげにそう言う中で、俺は咳払いを一つして我が弟子に二人の事を紹介する。

「リリイ、こつちが俺の姉弟子のトトリちゃん、こつちがこの国のお姫様のメルル姫」

「ひ、姫？」

「うむ、愛称でも何でもなく、正真正銘のお姫様だ」

そう言うと、リリイの動きはフリーズして、解凍したかと思えば背筋をピンと伸ばして。

「も、申し遅れました。私リリイ……、リリイと申します！」

「あはは、そんな緊張しないでよ。お姫様って言っても名前ばかりだし」

「そ、そんな事……」

「あります！」

俺は高らかに宣言した。

するとリリイが、目を見開いて俺の顔を見てきた。

しまった、つい勢いでやってしまった。

「マ、マスター!？」

「いや、だ、だってなあメルル姫？」

「そうそう、だからリリイもそんな畏まらないですよ、わたし達同じ錬金術士の卵同士なんだから」

「え、ええつと」

どうしたらいいですかと僅かに目線を送られたので、頷いておいた。

このお姫様にはおおよそ敬うという単語はふさわしくないと思う。

騎士中毒の人が来たらその例ではないが。

「う、うん。わかったわメルル。私達お友達で、いいのよね？」

まだ硬いながらも、柔らかな言葉遣いで話すリリイに大してメルル姫は。

「うん！ 仲良くしようねリリイ！」

「え……えええ」

少し逡巡したものの、最後には微笑みながらリリイは頷いた。

メルル姫には人と仲良くなる才能があると思う。

て言うか、いいなあ。俺にため口を聞いてもらいたいと願った師匠の気持ちに今になつてわかった。

「それじゃあ一緒に採取に行くわたしの幼馴染二人も紹介するよ！」

「え？ ちよつとメルル!? あ、マスター行ってきますね」

メルル姫に手を引かれて、半ば強引に連れて行かれたリリイ。

片手でも一応カバンを持っていった辺り、力は意外と弱くはないのかもしれない。

「よし、プラン・はじめてのおつかいを決行する。行けスタッフ」

「ぶに」

「え？」

アトリエから出ていくぶに。それを見て呆けた声を出すトトリちゃん、何を驚く事がある。

「俺が可愛い弟子をただ見送るだけと思うか？」

「た、確かに。でもちよつと過保護じゃないですか？」

過保護↓過剰保護。

過剰とは、必要な程度や数量を越えて多いこと。

「……俺の弟子愛に対する保護レベルとしてはなんらおかしくないな」

「そうですか」

諦めたように肩を落とすトトリちゃん。

いつそメルル姫レベルで活発な感じなら心配いらぬのかもしれない。

「ところでトトリちゃん」

「はい？」

「俺のちゃんづけって、今更ながらおかしくないよな？」

心に残る不安の一つ。

「へ？ おかしくないですよ、むしろリリイちゃんの事を呼び捨てにしてた事に少し驚きましたし」

「そ、そうか」

よかった、マジキモいんですけどなトトリちゃんはいなかった。

これで心置きなく仕事に取りかかれる。

「……………」

「どうしたんですか？」

「いや、な」

昨日ぶにとした討伐の仕事の報酬が生活費と花火フラムのためのフロジストンの代金に消える。

フロジストンが十個で260コール、報酬600コール、差し引き340コール。

……弟子がリリイじゃなかったら今頃大暴れだな。

立派なマスター目指して頑張ろう。

## お約束

街からそう遠くない森を四人で歩く、モンスターが襲ってきたりもしたけれどそのほとんどはライアス君がやつつけてくれるから私は安心して材料を集められる。

メルルも王女様なのに杖を振るって、ケイナもメイドなのに自分の身を自分で守れている、私も何かしたいけれど戦う方法なんて教えられたことのない私は眺めていることしかできなかつた。

分かつていた事だけど、足手まといなんだ。私。

うん、分かつてた。だからせめて自分がやる事はしっかりとやろう。

「それにしてもリリイ、アカネさんが師匠で不安とかなない？」

メルルと二人でしゃがみ込んで草を摘んでいると、変な事を聞かれた。

「ないわよ、マスターはとても優しい紳士じゃない」

「え？ アカネさんが紳士？」

目を見開いてじっと見つめられる、何か変な事を言ったかしら。そんな考えが頭をよぎるけれど、言う間もなくメルルは顔をほころばせて。

「ないない！　だつてアカネさん、わたしの名前メルル・シャンプーだー！　なんてからかってくる人だよ？」

「……………」

思わず小首をかしげてしまう。

あのマスターが人の、それも王女様の名前をそんなふうにあんなに想像がつかない、私達本当に今同じ人の話をしているのよね？

そう尋ねたくなるけれど、考えてみるとまだ出会って三日と経っていないのだから、まだ私の知らない一面があつても不思議じゃないのかもしれない。

でも……明るく朗らかな大人の男性、この印象は間違いじゃないですよね、マスター？

「他にも人のケーキ横から盗ろうとしたし——」

溢れて来る私のマスターとまるでイメージの繋がらない話の数々。

本当に間違いじゃないんですよ……ね？

トトリちゃんのアトリエで、俺ことマスターアカネは無心になろうと必死だった。



必死に無心になろうと頑張っていた。

釜の中をかき混ぜてフラムを作って、それを繰り返す。

そうしてないと吐きそう。

想像してみなさい、リリーのやわ肌が狼の爪で傷つくようなところを！

「う、うわああああ!!？」

あまりの恐ろしさに腰を抜かしてしまった。

くっそー！ あの野郎なんてことを！ 絶滅させてやろうか！

「ど、どうしたんですかアカネさん、急に?」

トトリちゃんが戸惑いの表情を浮かべていた、この恐ろしい未来図を語るなんて惨い

事は俺にはできない。

無言で立ち上がり、再び釜をかき混ぜを始める。

「マスターっていうのは大変だな」

「は、はあ……?」

いつそのことメルヴィアみたいな弟子だったら……。

「……………」

眉間に手を当てる。

マズイ、本格的に精神が乱れてきているようだ。

時はもうお昼すぎ、近場でパパッとなんだからそろそろ戻ってきてほしい。切実に。

「予行演習だ。予行演習をしよう」

「予行演習ですか？」

「ああ」

釜の中からできあがったフラムを取り上げながら、俺は肯定の言葉を挙げる。

脳内演習は昨晚やってもやり足りぬほどに繰り返したが、それでも足りぬ。もしもリイの前で舌を噛むなんてへまを試してみる。

……全てが破滅する。

「ちようど昼も食べてないし、パイでも作ってみよう」

材料は小麦粉に水、そして塩のオーソドックスなスタイル。

サイドテーブルにそれらを置き、釜に向かって左手に仮想リイを浮かび上がらせる。

妄想とわかっているが、緊張するぜ。

「よしリイ、パイを作るには小麦粉と塩、最後に水を入れてかき混ぜて……」

蓋をして少々待つ。

終わり。

「……………」

思わず天を仰ぎ見てしまった。

こんな時、ぷにのタツクルがないのが寂しい。

「トトリちゃん、殴ってくれないか？」

「あ、あはは……でも、最初なんですから、それくらい簡単でもいいんじゃないですか？」

流石はトトリちゃん、指導に優しさの色がにじみ出ている。

でも、すまない。俺は……俺は！

「難しい事をわかりやすく説明して……っ！ キャーマスター素敵！ そうっ、思われ

たいんだ！」

膝をつき、理解を求めめる視線を向けるが。

「で、でも、高望みは良くないですよ！」

「ぐうっ!？」

無自覚の刃が突き刺さった。

久々に食らうとダメージも大きい……。

「……トトリちゃんだって、メルル姫に『さっすがトトリ先生！ カッコイイです！』と

か言われたら、嬉しいだろ？」

「え、い、いや、それは……その」

想像してしまったのか、僅かに赤らめた頬に手を当てて、抑えきれない笑みを抑えようとしていた。

そうら見た事か。

「クツクツク、恥ずべきことではないよトトリ君。尊敬されて喜ばぬ師匠などどこにもいないのだから」

「な、何ですかその顔」

傍から見たら、おそらく少女を悪の道に引きずり込もうとするような悪い笑みを浮かべていたことだろう。

「俺たちの師匠だってそうだっただろう？」

「た、確かにそうですね」

あの人の場合喜ぶという次元ではなく、嬉しすぎて訳分からなくらいまで吹っ飛んでしまう。そして相当に調子に乗りだし、尊敬の目は瞬時に別の視線にチェンジするのだった。

「あれ？　そういうえば師匠今どこに？」

「あ、そう言えば言ってますませんでしたね。先生は……」

肝心な本題に入ろうとしたところで、トトリちゃんは急に口をつぐんでしまった。

言いづらそうに俺の目と天井や壁やと視線をうろちよろさせているかと思えば、意を

決したように真つすぐ俺の事を見て言う事には。

「じ、実験のためにアストリッドさんと一緒に——」

「ア、!?!」

反射的に声が出てトトリちゃんの言葉を遮ってしまった。

なんとも忌々しいというか、畏怖すべきというか、できれば二度とは聞きたくない名前が……。

「それは、あのアストリッドさんで?」

「はい、あのアストリッドさんです」

諸悪の根源。俺がアーランドに来る事になった全ての原因。

今となつては全部良い思い出というか、来なかつた自分を想像できないくらいに俺の人生にとって素晴らしい経験だった。

そうだな、嫌悪感とまでは言わずとも苦手意識を持っていたが、むしろ礼を言うべきなのかもしれない。きっと素晴らしい人なんだろうなあ。

んな訳ねえよ。

「あんな人と一緒……大丈夫なのか?」

手紙の文面からでさえ唯我独尊っぷりが漂うような人と一緒で。

師匠の師匠だから、そんな酷い事はしないだろうけど……。

「大丈夫ですよ。実際に会いましたけど本当にスゴイ人でしたから。きつと今頃先生と一緒に世界を変えちゃうくらいスゴイ実験をしますよ」

「世界を変えちゃうくらい……ねえ」

確かに次元の壁を軽くぶち抜いてしまっただけだし、あり得ない話ではない。

というか現実の話として、俺は既に世界を抽象的ではなく物理的に変えられている。

「そ、そう思うとワクワクしてくるな」

「ですよねですよね！」

天才二人が力を合わせているとなると、錬金術界に何か革命的な事が起きるかもしれない……。時間旅行？ はたまた宇宙進出とか？

「うむ、次に師匠に会うのが楽しみだな」

「そうですね、きつと今までにないくらいに驚く事になるんだろうなあ」

「ついでに噂のアストリッドさんに当てられて、少しは大人っぽくなってれば弟子として安心なだけだな」

「あはは」

朗らかに笑い合っていると、突然アトリエの扉が開いた。

「たっだいまー！」

「あ、おかえりメルルちゃん」

元気良く入ってくるメルル姫、その後ろにケイナちゃんと我が弟子リリイ。

……数時間見ないうちにまた可愛くなつたかもしれない。ヤバいぜ俺の弟子。しかつし、そんな素振りは見せない！

スイッチをいつものアカネさんから、イケイケマスターへと入れ替える！

振り返り、クールに頬笑み、口を開いて言う事には。

「おかえりリイ！」

「へ？ た、ただいマスター？」

面を喰らつた顔をしつつも、小首を傾げてそう言つてくれるリリイ、意外にノリはいらしい。

これ以上触れずにちよつとお茶目なマスタージョークで済ませよう。でないとどんな火傷していく未来しか見えない。

「ね、言つたとおりでしょ？」

「え、ええ……でも…………」

手で壁を作つてこそこそ喋るリリイとメルル姫、俺は耳が良いのです。聞こえているのです。

どうせ姫が俺の本性というか、おおよそ紳士的ではない部分を語ったりでもしていたのだろう。

数時間とはいえ築き上げた師弟の信頼、そう易々と打ち碎けるものではない。

リリーの俺を見る不安げな顔つきは気のせいだい、そうなんだい！

「よし！ 早速帰って錬金術の実習をしようか！」

「は、はい！」

手をパンパンと打ち鳴らしながら内緒話をする二人の横を通り抜けて扉の方へ。

多少強引かもしれないが、そんなことは言つてられん。

これ以上事実を吹き込まれては敵わない。

トトリちゃんのアトリエからアカネのアトリエへと向かう道中、二歩後ろをついて来るリリーが終始無言だったのがとても胸に痛い。

かと言つて、実は俺はあまり頭がよろしくないんだと暴露したとしよう。

それでリリーが『なんだマスターはバカだったんですか、不安解消！ これで安心して錬金術を教えてもらえます！』なんてなるとは思えない。

安心と信頼のトトリちゃんに走るのが目に見える。

こんな可愛い子が俺の弟子になるという奇跡、それを守るためには威厳を見せるしか



ないのだ。他でもない、このアトリエで！

「よし、それでは早速実践に入ります」

「は、はい！」

並んだ二つの釜の右側に立ち、背筋をピンと伸ばしたりリイに向かい合って話を進める。

「まずは採取してきた材料で錬金術を行おう」

「……あの、マスター？ 最初は座学とかじゃないんですか？」

「……………」

座学？ 知らない言葉だ。

俺の師匠ことロロナ師匠も実践から入っていた。あの時は師匠マジパねえとバカにしていたが、今になって思えば、アレは錬金術で何かを作るといふ喜びを与えるための粋な計らい……だったらしいなあ。

最初に実技も良いけど、師匠は絶対に細かいこと考えずフィーリングでそれを選んだ。間違いなく。

「俺もトトリちゃんも、最初は師匠監修の下で錬金術をやったんだ」

「そ、そうなんですか」

頑張りますとばかりに手をグツと握るリイ。

本当に『最初は』だったという事は、俺の胸の内にはしまっておこう。

「それじゃあ何を採用してきたかは……まあ大体わかるけど、見せてくれ」

「えっと……これで良いんでしようか？」

床に置かれて開かれたトランクケースの中には、お馴染みのマジックグラスや木片、以前大繁殖していたプレイン草が合わせてカバンの容量の三分の一程度入っていた。

これなら予定通りにプランを進められそうだ。

「グッドグッド、それじゃあマジックグラスとプレイン草を使って初心者向けかつ絶対に覚えておくべき物を作るとしよう」

「よ、よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げるリリイに指示を出す。

マジックグラスを煎じたりと下ごしらえをさせて、試験管数本とプレイン草の粉を横のテーブルに置いて、さあ本番だ。

「……………」

「マスター？ 次はどうすれば？」

俺の顔を見上げるリリイを見て思う、トトリちゃんとの出会いは爆発、俺のファースト錬金術も爆発、師匠に至っては爆発より酷い出会いだった。

爆発せずに一人前になった人はいないとは言え、そろそろ初心者⇨爆発という通例を

吹き飛ばしてもらいたい。

「まずは杖を持つ」

「は、はい！」

飾り気のない質素な木の杖を両の手に持って身構えるリリイに、次なる指示を飛ばす。

「そしてこの試験管の中身を最初に入れます」

「わ、わかりました」

三本立てられた試験管、赤、緑、黄色の中の赤い奴を手渡す。

「入れたらぐるぐる……時計回りに攪拌します」

俺の言葉に従おうと必死なのか、前半をもう忘れたかのように頬を赤くして一生懸命かき混ぜるリリイ。

師匠の教える呪縛はいつまで俺の体を蝕むのだろうか……。

今では若干ながら師匠の本能が俺の体にインプットされている、恐ろしい。

「それなら次は二本一緒に入れながら同じように混ぜて、混ぜながら粉をばらばらと入れる」

「二本入れて……」

小声で復唱しながら、袖のフリルをはためかせつつ忙しなく手を動かす。

試験管の中の液体を入れ終わり、粉を摘んだりリイは釜の上にそのまま左手を動かすと。

「えっと、マスター？ ばらばらーってこんな感じですか？」

「いや、それだとパラパラパラ………」

デジャヴ。

昔、立場は違えど同じような事があつた気がするぜ……。

「悪かった、正しく言おう、指の第一関節まで挟み込むんだ」

俺は極めて冷静にそう言いながらリイの脇を持つて抱え、そのまま百八十度反転した。

「きゃ!? ま、マスター!?!」

「覚えておくんだリイ! 錬金術士っていうのは……爆発から始まるんだ!」

後ろに視線をやると、釜の中が七色に輝いていた。

どんどん輝き増していき、真っ白な光に変わった、爆発までもう一瞬。

はつきり言おう。

こうなるんじゃないかと思っていた。

弟子を育てるって難しいな！ 師匠！

虚空に向かって微笑むと、背中に懐かしい衝撃が――。